

平成29年度
市町村文化講演会

講 演 録

日時：平成29年8月21日(月) 13:30～15:30

場所：横手市 ふれあいセンター
かまくら館2階ホール

(公財)秋田県市町村振興協会

講師プロフィール



漫画家 東村 アキコ 氏

1999年に漫画家デビュー。2015年、自身の半生を描いた『かくかくしかじか』で第8回マンガ大賞、第19回文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞受賞。2014年から「Kiss」（講談社）で連載している『東京タラレバ娘』は2015年に第6回 anan マンガ大賞の大賞に選ばれたほか、2017年に日本テレビ系でテレビドラマ化された。



マンガ研究家 吉村 和真 氏

マンガ文化研究の第一人者。『マンガの教科書』（08年）をはじめとする多くの本を執筆する傍ら、2001年の日本マンガ学会設立や2006年の京都国際マンガミュージアム設立に尽力し、マンガ文化の発展に貢献。現在は同館の研究センター長、及び京都精華大学副学長を務める。



バリュー・クリエイター 佐藤 真一 氏

リクルート社を退社後、2006年に株式会社バリュー・クリエーション・サービス設立。全国の地域活性、観光振興を目的とした戦略立案などを手掛ける。自身がプロデューサーを務めた「瀬戸内しまのわ2014」プロジェクトでは588万の来場者を集め、大成功を収めた。2015年、一般社団法人地域ブランディング協会理事に就任。

会場風景



文化講演会

日 時：平成29年8月21日(月) 13:30～15:30

場 所：横手市 ふれあいセンターかまくら館2階ホール

司会（AKTアナウンサー 八代星子 氏）

皆さま、本日はお忙しいなか秋田県市町村文化講演会「マンガは文化」にお越しいただきまして誠にありがとうございます。私は本日司会を務めさせていただきます、秋田テレビアナウンサーの八代星子と申します。本日はどうぞよろしくお願いたします。

さて本日は「マンガは文化」をテーマにトークセッションをご覧いただきたいと思ます。

国内のみならず世界中から注目を集める日本のマンガ文化。平成31年にリニューアルオープンする横手市増田まんが美術館は、マンガ文化を発信する拠点として大きな可能性を秘めています。この美術館が持つ価値とマンガを活用して地域に人を呼び込む仕掛けづくりについて、人気マンガ家、マンガ研究家、地域の価値を創造するプロデューサーのお三方がそれぞれの視点で議論いたします。

それでは開演に先立ちまして、横手市長高橋大よりご挨拶を申し上げます。

横手市長 高橋大 氏

皆さんこんにちは。ただいま紹介いただきました、横手市の市長をしております高橋でございます。本日は市町村文化講演会ということで「マンガは文化」と題しましてトークセッションを行います。ようこそいらっしゃいました。心より歓迎を申し上げます次第でございます。本日は東村先生、吉村先生、佐藤先生のトークセッションということで繰り広げられるわけでございますけれども、横手市は

いま県との合同によります市町村未来づくり協同プログラム「横手プロジェクト」と題しまして増田にあります、まんが美術館のリニューアルということで事業を実施中でございます。ただいまそのまんが美術館は閉館中でございますけれども様々なソフト事業を展開しながら、なんとかマンガの文化を通じた町おこし町づくりに繋げている最中でございます。さて、まんが美術館でございますけれども、いま数多くの著名マンガ家さんのご協力の下、10万枚を超える作品、いわゆる原画でございますけれども収蔵してございまして、将来的には20万枚、30万枚と多く集めてそれを随時展示しながら、また様々な作品展等を繰り広げながら、お客様がこの増田、横手に多く集まっていたくような取組に繋げていきたい、そしてマンガの素晴らしい文化を日本はもちろん世界中に発信していきたいという取組をこれから実施する最中でございます。是非、今日ご参加の皆様方におかれましても、リニューアルオープン後、こぞってお誘い合わせの上、増田のまんが美術館に足を運んでいただければと思っております。本日は、こちらのお三方によるトークセッション、私も最前列の皆様方と一緒に楽しみながら聞きたいと思っております。どうか皆様方にとりまして、有意義な時間となりますよう心より祈念申し上げまして、ご参加いただいた御礼のあいさつに代えさせていただきますと思ます。本日は誠にありがとうございました。

司会

高橋市長ありがとうございました。

それではトークセッションに移りたいと思います。まずはじめに、1年に300日も全国を飛び回り地域の資源活動をプロデュースするお仕事をされています、バリュウクリエイターの佐藤真一様にご登場いただきます。拍手でお迎えください。

佐藤真一 氏

(バリュウ・クリエーション・サービス 社長)

皆さん、こんにちは。今、ご紹介いただきました佐藤といいます。今日は、地域にはいろんな資源があるんですけど、その中でも『マンガ』というちょっと特殊と言えば特殊なんですけども、世界に出せるような資源、文化になってきていますから、そういったものをどう町としてどのように出すかというお話しをしていきたいと思えます。この後、ちょっと堅い話を挟みつつ、柔らかい話を挟みつつ、それから会場の方にも後で質問とかもしていただいて結構だと聞いていますので、何かお話があればそういったものをぶつけながらやりたいと思えますので、2時間ぐらいですね、お付き合いいただければと思っております。

今日は、先程市長からもありましたけども、横手市の増田まんが美術館というのは、もう既に出来上がっていたんですけども、どんなものかという、日本を代表するマンガ文化発信拠点として誕生したんですね。ところが、大分時が経つと資源というのはだんだん劣化していきいます。ハードだけでなくソフトも含めて、そうなる中で集客力が若干落ちてきた。そこにおいて、もう一回これを町の活性化に生かそうということで、平成31年度に向けてのリニューアルをしています。

その中で、マンガの原画というものを活かした差別化、全国にたくさんのマンガを活か

した活動をしている地域がたくさんあるんですけども、ここでは原画を活かした差別化をやっているということと、後でまた話していただくんですけども、あえてこの『美術館』と名乗ったことですね。美術館、博物館、ミュージアムで何が違うのかということも含めて、あえてこういうタイトルを付けた背景も含めて、話しができればというふうに思っております。

ちょっとここから5分だけ堅い話をさせていただいて、その後、吉村先生を呼び込んでですね話をしていきますけれども、文化以外にも地域にはたくさん資源があって、それをどう生かすかっていうところがポイントなんですけども、課題が明確であれば必ず解決しますし、そこに価値は生まれるというふうに思っています。ですから、マンガもなかなか難しい部分であるんですけども、一方すごい価値を生む素材だと思っておりますから、そういった話を少しだけさせてください。

実はこれから日本って人口が減ってくるんですね。今までも人口減少と言われてたんですが、実はこれからどんどん減っていく中で最終的には2060年とかには4千万人ぐらい減っちゃうと。こうなったときに町ってどうなっていくんだろうみたいな話を、やっぱりどこも抱えているんですね。その中でどんな資源を生かしてやっていくか、ここはマンガを文化として生かそうっていう話なんですけども、ほかの地域の皆さんは自分のところの資源、文化をどう生かすかっていうことに置き換えていただければいいと思えます。

僕、今年で50になったんですけども、日本って僕が生まれた頃とか物心ついた頃って、すごく地方って魅力的だったんですね。すごくそこに色があって、すごく何か地域地域に色もあった。それがだんだん都市化する中で、実は地方でありながら地方でない化が加速し

てくる。どこ行っても同じ色、こういうようないわば課題、問題なんですね。解決しない問題だと思います。

その中で今までやってきたことと違うやり方、ここは原画を生かすとか、それからあえて美術館とか、どこでもありそうなものだけでも、あえてそこに差別化するようなものをどうしていくかっていう、そのときに、過去もそうなんですけども、これから新しい時代に適用するものをどうしていくかということがポイントな中で、もう既に定着している価値ではなくて、潜在的に持っている価値、今日1番申し上げたいのは、あえて美術館にした何かという部分。それから原画の価値、この後、専門家と、それから人気マンガ家の先生を呼んで話していくのですが、その原画の価値って何だろう。想定外の価値に、わくわく、どきどき、そしてなるほどみたいなのが含まれるときに人は動きますから、こういったところをどう掘り起こすか、それからもっと言うと、楽しんでいただいているか、それから、今日は地元の方が多いと思うのですが、地元がそれをどう扱うかっていうのが地域活性のポイントだと思っていますので、そういった観点で、ちょっと堅いですけども見ていただければと思っています。

実は僕の方で2014年に広島と愛媛の間の島ですね、両県の人もほとんど行ったことのない島々を対象にイベントというのをやったんです。当時、多分、両県知事に言っていたけども、そんなに人は来ないだろうという話だったのですが、それまで地域の方がやってきた文化とか生活とか、それからいろんなスタイル、そういったものを少し「今風」にアレンジしてイベントというのを組んでみました。

その結果、最終的には80万人ぐらい人を呼びたいって話だったのですが、地域が頑

張って418の企画を作りました。ほぼ民間でやりました。結果として580万人来た。経済効果とかもありますけども、そういった中で最終的に地域づくりのデザインという賞をいただきました。このときに僕が思ったのは、やっぱり10年、20年前と全く違って、今は今の人がいるわけで、その人たちに応じた作り方をすれば変わっていくのではないかと。ですから、この後掘り下げる中でいうと、『マンガは文化』というのは言葉として簡単なのですが、じゃあどう扱っていくかというところを、ちょっと皆さんと、専門家を交えて話していきたいなと思っています。

最後ですね、これから最終的に締めの部分、先には言っちゃおうとですね、社会が望んでいるってことをどう捉えていくかという、思い描く「想像力」ですね。この想像力、それから、地元、地域ができることを形にする「創造力」、これをどうマーケティングというか市場しながら、そういったところを展開して、最後はその地域にしかないオンリーワンの商品、サービスに仕上げながら、若干儲けるみたいなのところももっていければというふうに思っています。

じゃあここからいよいよ、吉村先生に入っていて、このマンガの文化、歴史あたりを少し探っていきたいと思っています。

では、吉村先生をお呼びしたいと思っています。

吉村和真 氏（京都精華大学 副学長）

昨日はどうもありがとうございました。

佐藤真一 氏

じゃあお座りいただいて、ちょっとだけ僕が前座しますので、その後は先生に話していただきます。

「鳥獣戯画」というマンガを知っている方

いらっしやいます？実はそういうものは、今のマンガとは多分違うと思うんですけど、その辺は先生がプロだと思うんですけども、当時のマンガって、画として情景描写で人を楽しませたんですけども、ここに言葉というか活字が入って、今のマンガってありますけども、もともと振り返れば千年以上前から日本ってこういう文化を持っているんです。それこそ伝統文化です。

おそらく定義、これは先生に聞いた方が早いと思うんですけども、多分有名な手塚先生がマンガっていうのを携わられてから、世界に向けてはこの「MANGA」っていう横文字を使うようになって、最終的にはこれって日本文化だよ。世界に代表できるようなそういうものだっていう話がありました。僕この横手の増田まんが美術館が出来たときの冊子をいただいたんです。その中に地元出身の矢口先生が書かれていたこの言葉がすごく感動してですね、当時から「マンガは、昭和の日本が生み出した最もパワフルな文化だ」と言い切ってるんですね。この辺がさすがにこの地域すごいなっていうことで、この辺から話を入れていきたいと思っています。

その中で、マンガっていうのはアニメとかですね、それから実写映画化とか、劇場化とかいう形でどんどん進んで展開して行って、新たな、マンガの文化そのものが新たな娯楽文化を生み出しているような、マンガっていう存在はすごいなと思ってんですけど、この辺からちょっと吉村先生にお話をいただきたいんですけど、実際ザーッと説明しちゃいましたけども、もうちょっと会場の方にわかりやすくというか、先生なりの言葉で語ってもらっていいですかね。

吉村和真 氏

マンガっていうのはですね、僕の立場から言うとですね、マンガの研究者って言ったときに、一体何を研究しているんだと。あるいは、マンガの大学と呼ばれている京都精華大学というところで、マンガの学部っていうのを創ってやっているんですけど、そもそも大学でマンガをどうやって勉強しているんだろうという素朴な疑問をお持ちだと思うんですよ。それはですね、裏を返すとマンガなんて読めばわかるし、マンガをいちいち学んで一体何かと思っているからそういう疑問が起きるんですが、実はですねマンガって、後からわかりますけども、描く方も解釈する方も、普通の文字とかに比べても、もっともって多様で難しかったりするんですね。マンガから引き出せるものはたくさんあるんですが、あまりにも僕たちが当たり前のようにマンガを読み過ぎているので、普通にマンガと付き合っているのに、そのマンガと距離をとるのが難しいです。こういうふうには歴史に落として説明してもらったり、マンガはいろんなところに展開していますよというの、何となくわかるんですけど、実感するっていうのが非常に難しいですね。これをどうやって言葉にししながら、そしてそのマンガの面白さを原画というところから紐解いていくと何が見えてくるのかというのもですね、この後皆さんと考えていきたいと思っていますので、マンガとは何かは、今のところマンガはあまりにも私たちの身近にあり過ぎて、それが何なのか難しい、説明するのが難しいものだと思っただけなのがいいんじゃないかと思っています。

佐藤真一 氏

じゃあそこからまずスタートしていきましょうか。ありがとうございます。

吉村和真 氏

そうですね、そしたらちょっとだけ、すぐに終わりますので、ちょっと切り替えてもらえると有り難いんですが、2つほど話題提供して終わっておきますね。

日本全国、実はたくさんたくさんマンガに関係するもの、アニメに関係する施設というのがあってですね。約70ほどございます。その中で1つは私やってきました京都ですね。京都国際マンガミュージアムというのがあります。もう1つは北九州市にもマンガミュージアムというのがあります。そしてご当地、横手の増田まんが美術館がここにあるんですね。数ある中にそうした様々なマンガを集めているところは、数えるほどしかないという事実と、この総合マンガミュージアムの中でも原画を特に手厚く扱っているのは、ここしかないよというのを、まず全国的な傾向から押さえておきたいということでごらんいただきました。

それと、先程から言っているマンガがあまりにも身近だっという話をするときにですね、ちょっと一例だけ追加して終わりますね。ここにあるのは新刊なんですけども、これももう既に懐かしいと思われる方多いですけど「ひまわりっ!」の最終刊ですね。13巻でグラッドフィナーレを迎えているんですが、僕がここでお見せしたいのは内容じゃなくてですね、裏です。何が見えるかというんですね、260円で、これ中古で売ってるんですね。どこで買って来たかって、これ横手のブックオフで昨日買って来ました。何が言いたいかって言うと、マンガの価値っていうのは新刊で売られているときから、こうやって中古になって、そしてまた私が買い戻すように、1回買ったのを売ってたりするわけですね。それをもう1回買って来る。マンガミュージアムなんていうのも、みんなが捨てたマンガを

もう1回集めて価値を創造するような場所なんですけど、じゃあ一体こういう商品とは別にマンガの原画っていうのはですね、どんな価値があるんだろうということを考える上でも、まずは、繰り返します。全国に数ある施設の中で、この横手にしかない機能として原画收藏の場所がある。そして、一方、私たちがマンガと付き合う中で、その価値って一体何だろうと考える上では、いろんな不思議なことをですねマンガは抱えていて、もっともっとうやっやっ安く売られたりする中で原画にどんな価値を見出せるのかということをして、この後、作者のアキコ先生にお話しを聞きながら一緒に考えていければと思います。

佐藤真一 氏

ありがとうございます。

じゃあ男2人でね、ここで話してるのも限界きましたので、早く呼びたいと思います。

それでは、司会の方でお願いします。

司会

それでは、私から東村先生のプロフィールをご紹介します。

東村アキコ先生は、宮崎県のご出身で、1999年「ぶ〜けデラックス」NEW YEAR増刊号『フルーツこうもり』でマンガ家デビューされました。その後も数多くの作品を世に送り出し、2015年には自身の半生を描いた『かくかくしかじか』が第8回マンガ大賞、第19回文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞されました。2008年からマンガ雑誌「kiss」で連載を開始した『海月姫』は、2014年に映画化され、2014年から同雑誌で連載を開始した『東京タラレバ娘』は、2017年にテレビドラマ化されました。東村アキコ先生は、まさに日本を代表するマンガ家のお一人でございます。

佐藤真一 氏

それでは、先生をお呼びしたいと思います。
アキコ先生、どうぞ、ご登場ください。

東村アキコ 氏（マンガ家）

皆さん、今日は暑い中、夏休みの最中、お集まりいただきありがとうございます。マンガ家の東村アキコです。よろしくお願いします。

佐藤真一 氏

実は今日ご参加していただいた皆さんへ申し込みのときに、好きなマンガは何ですかと聞きました。これに関して集計いただきましたので、それをまずちょっと発表してから話を深めていきたいんですけども、世の中本当に数えきれないほどのものがあります。どんなマンガ家のどんな作品が選ばれたかっていうのは人それぞれなんですけども、発表する前に、ちょっと私事で恐縮ですけど、僕は本当にマンガ大好きで、よくある『アトム』から始まって、しばらくずっとマンガお休みしてたんですけども、たまたまこの『ワンピース』に出会って、今また復活して、何やってるかという、昔買って売っちゃったマンガをまた買い戻しているんです。さっきの吉村先生の話で、安く買えますし、また今回こういった機会をいただきましたので、アキコ先生の作品も読ませていただきました。で、何を感じたかという、やっぱり人ってそれぞれね、マンガっていろんなあれあると思うんですけど、僕なんか意外とこの人格を形成するマンガにはまってまして、これ仕事なんです。仕事だけ地域地域にあったマンガに関するものとか、そういうシーンがあったりする中で、それを趣味にも生かしますけど、お仕事に生かしている、そういう部分が実際あります。

吉村和真 氏

今、僕のところに1人の学生が来てるんですよ。その人は何者かというんですね、一度僕のいるマンガ学部を卒業して、高校の先生をやっていました。ところが、マンガ家の夢が諦めきれずに高校の先生を続けていいのかどうか悩んでいたら、その高校である教え子からですね、このマンガ、先生読んでみたらと渡されたのがアキコ先生の『かくかくしかじか』だったんですよね。それを読んでですね、もう高校の先生をやってる場合じゃなくて、やっぱり私はマンガ家として描くしかない！とですね、もうその子は一念発起したわけですね。

東村アキコ 氏

で、辞めたんでしょう？先生。

吉村和真 氏

高校の先生辞めたんですよ。

東村アキコ 氏

私のマンガ読んで、そんな、今この就職ないのに、そんな安定した職業を辞めたというのを昨日聞いたんですよ。

吉村和真 氏

そうです。で、辞めた責任をどう取ってくれるんですかっていうことで、昨日、実は連れてきてたんですよ。で、本当に1番影響を受けたマンガはその『かくかくしかじか』の東村アキコさんと話をして、ここから昨日のアドバイスに入っていくわけですね。

佐藤真一 氏

昨日ね、そういう話しながら、僕ら知らされてなかったんですね。だから何か仕事の話と違う話をしていて。

東村アキコ 氏

京都精華大学の研究室の方で、その高校の先生辞めた人でマンガ家目指している人も一緒に勉強なるからってついてきてて、ここにね、で、飲み会で昨日その打合せしてたら、

最後に、こういうことがありましてマンガ家の夢をまだ諦めてなくて一念発起して描いたんで、見てくださって言って原稿を出してこられたわけ。最後の方に。

吉村和真 氏

どうせ面白くないだろうって言ってましたからね。

東村アキコ 氏

私が、でもね、すごいき緊張しているわけ。もうさ、持ってきたんですけど、見せていいですか、でもやっぱほら勇気もいるじゃない、そういうのって。私は、大丈夫大丈夫、もうね、どうせ面白くもないから見せてみればみたいな。

吉村和真 氏

そうそう、ものすごくハードル下げてくださいね。

東村アキコ 氏

ハードル下げたら、どきどきするよね、そういう瞬間ってね、見せるマンガ家目指している人は。で、私が言ったのは、割と大体みんな誰でもマンガ家ってなれるから、多分なれるから大丈夫みたいなのをずっと言ってたんですけど、すごいその方のマンガは、絵も上手だったし、美術の勉強してらっしゃったそうで、上手だったし、ああもう大丈夫大丈夫みたいな感じで終わったんですけど、私の持論としては、マンガは今の時代は媒体が多いので、簡単に言うとツイッターでも何でも発表できるでしょ、今、ブログでも。そういうのも含めたら、マンガ家って誰でもなれるんですよ、今という話なんですけどね。

佐藤真一 氏

それね、真に受けちゃった方がいいと思うんですけど、僕らなんかね、絵なんか全然描けないんですよ。描けないんですけど、あの場面のあそこに行ったらねわかると思うんですけど、本当にアキコ先生がそう言われて。し

かもね、こちらにいらっしやいますけど、大手出版社のね出版者の方もいらっしやって。

東村アキコ 氏

私の担当の『タラレバ』の担当、担当っていう人ね、出版社のマンガ家の相棒の人のことを。『タラレバ娘』の担当の人も一緒にいたんだけど。

佐藤真一 氏

その2人で見てでしょ、人気マンガ家の先生がいて、大手の出版社の、しかも売れっ子さんに携わった方がいらっしやって、で、見られていて、相当僕、タフだと思ったんですよ。根性あるなって。だけど、そういうたまたまのきっかけ、本当数分の出来事の中でね、こういう話ができるぐらい、でもこれきっかけ、このマンガなんですね。こういうことが多分いろんなところで起きているんじゃないかと思うんですよ。

東村アキコ 氏

そうですね、うん。

吉村和真 氏

僕の立場から言うとですね、マンガって描く、読むって楽しみ方があるわけですよ。だけど、その読んだ作品から受けた影響とか、あるいはマンガができるまでの過程を知るとか、その辺って実はほとんどわかってないんですよ。そこにちょっと体験をすることでマンガの見え方って変わるんですよ。だから、本当に昨日、プライベートな30分ぐらいのたまたま起きたこの事件でも、実はきちんと言葉にして、こういうことなんだよ、マンガの面白さって難しさってここにあるんだよっていうことを、どうやってみんなに伝えることができるか、これを考えるとですね、美術館とかが持っている意味がガラッと変わってくるんですよ。

東村アキコ 氏

昨日のやつを、じゃあまんが美術館で、う

まいことコンテンツ化できるかもしれないって話じゃないですか。例えば、マンガ家になりたい人が夏休みのこの日に集まって、例えば私とかより、なんかもっとすごいマンガ家の先生が来て、原稿を見たりさ、オープンスクールみたいに。

吉村和真 氏

そうですね、出張編集部みたいなね。

東村アキコ 氏

見てあげて、そのさ、人が原稿見られてワーワー言われているのも、みんな見たら勉強なと思うんですよ。とかね、そういうことにも生かせるなっていうことですよ。

吉村和真 氏

その原稿を見てるスピードがね、異常に速いんですよ。アキコさん、あれ酔っぱらってるからですか。

東村アキコ 氏

それもありますね。もうね、何日もかけて描いたね、その新人さんの原稿を、2秒ぐらいで見るんですよ。それが気持ちなわけ、こっちは。そんなねゆっくりなんて見てらんねえなっていう感じでね、私もそうされてきましたからね。読書ってさ、こんなもんじゃないですか、めくるスピードって。何日かけて描こうか。だから、そのぐらいのスピードで見て入ってこないと、ダメなんじゃないかなっていうのは私も先輩たちに言われてきたことなんで。

吉村和真 氏

そこがね、実は深いんですよ。マンガって、本当雑誌なんて、2秒どころか、面白くないと思ったら全部飛ばすんですよ。

東村アキコ 氏

うん、そうですね。

吉村和真 氏

それぐらい一瞬にしてマンガの面白さとか、自分に合うか合わないかっていうのは判

断してるんですよ。何でそれができるのっていう話と、裏を返すと美術館で、じゃあじっくり読むっていうのは、普段やってることと全く違う方法でマンガと接しているわけですよ。

佐藤真一 氏

なるほどね。深いですね。

吉村和真 氏

だから、好きなマンガを読みに行こうとは全く違う感覚でマンガミュージアムに行く、まんが美術館で何かを学ぶっていうことを僕らが発想しないと、だったらマンガミュージアムなんか行かなくて、マンガミュージアムにお金払うぐらいだったら、雑誌3冊ぐらい買って部屋で読んどくわみたいな話になっちゃうんですよ。

東村アキコ 氏

今、NHKで浦沢直樹先生がやっている「漫勉」ってあるでしょ。あれ、めっちゃ視聴率いいんですよ。

吉村和真 氏

最初の方に出てましたね。

東村アキコ 氏

うん、出させていただいたんだけど、私たちからすると、何が面白いの、この番組っていうかさ、はあ？とか思ってたんだけど、ふた開けてみたらもうすごいみんな見てるみたいで、ああ、みんなそんな興味あるんだなって。

吉村和真 氏

ちなみに、昨日、アキコさんに言われたうちの学生は、昨日のお昼までは、どうやったらマンガ家になれるんだろうって悩んでたんですけど、もう今日の朝は、マンガ家になれてしまうからどうしようって、違う悩みに変わってましたからね。

東村アキコ 氏

私だってうちのアシスタント、うちいっぱ

いね若手のアシスタントで、もう完全に全然素人の状態でうちに来ますけど、デビューできなかった奴、見たことないですよ。大体みんなデビューしますよ。

吉村和真 氏

これちょっと一般的な話と思わない方がいい。

東村アキコ 氏

私はやっぱさ、なれるってって言って、なれないわけないじゃん、こんな職業。誰だってなれるんだから、今はもう1万人ぐらいいるんじゃないのって、最悪自分で自称マンガ家って言えばいいじゃんとかってって、なれるなれるって言ってると、みんなさ前向きになるからさ、なっちゃうんですよ。なれないよ、難しいよ、狭き門だよとかね、こんなじゃなれないよっていう先生も多いけど、うちはなれるなれる、100パーなれる、100パーなれるって。

だってさ、オリンピック選手とかは無理だけど、Jリーガーは無理だけど、マンガ家はまあ、まあイケるでしょ、4コマとかでもなんかパパって書いてさ、なんかちょっとオチつけなければなれるんだからみたいな。

佐藤真一 氏

だんだんなれる気なってきましたね。

吉村和真 氏

そう、それでみんな描こうと思うようになるでしょ。これがすごいんですよ。

東村アキコ 氏

そんなもんなんですよ、マンガなんていうのは、もともとは。

吉村和真 氏

ちなみに、うちの大学の先生でもあるんです、東村さん。

東村アキコ 氏

あっ私、京都精華大学のギャグマンガ学部みたいのがあるんですけど、あったんですけ

ど、そこの先生、年2、3回ぐらいちょっと教えて行ってるんですけど。

吉村和真 氏

だからあんなにギャグマンガの生徒がみんな自信持ってるんですね。

東村アキコ 氏

そうですね。ギャグなんて特に誰でもなれるんですかね、面白いの描けば。

吉村和真 氏

でも異様にね、在学中のデビュー率が高いんですよ、そのギャグマンガコースってというのは。

東村アキコ 氏

面白いのは、なんかね、面白いことぐらい言えるでしょう、みんな。例えばさ、宴会とかさ友達と集まっててさ、面白いことぐらい言えるじゃないですか、誰でも。だってそんなサッカーでさ、オーバーヘッドキックしろっていうのとき、面白いことちょっと描いてよっていうのは、全然レベルが違うから、面白いことを何か描けば大体できるんですよ、ギャグは。

面白いこと言えるから、ギャグマンガ家なれるじゃないですか。

佐藤真一 氏

めっちゃマンガ家っぽいですよ、先生。

東村アキコ 氏

そんなハードルの高い世界ではないっていうのは、ホントに言いたいですね、目指している人に。

佐藤真一 氏

嬉しいですよ、そういう言い方をしてくれると、僕らみたいになかなか関わりのない人間からすると、すごい身近に感じるし、そんな中でね、ちょっとこの話またちょっと終わっちゃうんで、話を戻しますけど。

<スライドにて聴講者アンケートの好きなマンガランキングを発表。東村アキコ先生のマンガが上位を独占している。>

吉村和真 氏

これ、最高ですよ。

佐藤真一 氏

すごくないですか。

東村アキコ 氏

ああ、これ、なんかちゃんと正しいアンケートですね。

佐藤真一 氏

正しいと思うんですよ、僕何も関わってないですよ。

東村アキコ 氏

これ、ヤラセですか、これ。ヤラセでしょ。

佐藤真一 氏

ヤラセだったら、もうちょっとちゃんとやります。これ、7ですよ、本当に。

東村アキコ 氏

ファンの人が来てくださったんだね、いっぱい、ありがとう、みんな。

佐藤真一 氏

でもなんか見ると、読んだことがあるマンガもあれば、知ってるけど読んだことないやつとかね、なんかそんなようなのもあって、やっぱり広いなあと思うんですけど、やっぱりパッと見たときに、自分が今読んだことあるやつがあると嬉しいんですね、すごく。一緒だみたいな、誰かこの中に同じマンガ好きな人いるみたいな、そういう感覚なってくるのもあるんで。

吉村和真 氏

そうですね。ちゃんと『釣りキチ三平』入ってますよね。

佐藤真一 氏

吉村先生、これ見て何か思うことありますか？ざっと見て。

吉村和真 氏

まず、東村先生の作品で、1つだけここに『メロボンだし！』が入ってますね。

東村アキコ 氏

私の作品で1番売れなかったマンガね。

すごいなんかジャンルが広いなと思いましたが、年齢層も性別も結構広いなと思いました。

吉村和真 氏

そうですね。ちょっと研究的に言うんですけど、共通の書って呼ばれるものが80年代以降、なくなったって言われてるんですよ。

これね、マンガに限らず、一般的な本も含めて。誰もが読んでも本っていうのが80年代にはあったと。だけど、もうあまりにも作品数が多すぎて、ベストセラーすら読んでない人がたくさんいるっていう世の中になったらいいんですが、それを最後まで頑張るとどめたのが『ドラゴンボール』って言われてるんですよ。『ドラゴンボール』は、読んでなくてもとにかくみんな見たことがある、知ってる。

でね、この中で地元好きの方がやっぱりちゃんといらっしゃって、『釣りキチ三平』以外に『目玉焼きの黄身いつつぶす？』というマンガも入っています。

東村アキコ 氏

知ってる？『目玉焼きの黄身いつつぶす？』って知ってる？

吉村和真 氏

地元の先生ですよ。

東村アキコ 氏

大雄？（会場から「羽後町」との声）ウゴマチ？ウゴマチ出身のおおひなたごう先生っていう、どこ高校？（会場から「湯沢高校」との声）ユザワ高校？読みましょう、みんな。『目玉焼きの』、めっちゃ面白いんですよ。アニメにもなってたんだよ、アニメにも。

吉村和真 氏

そうです。おおひなたごう先生も実はうちの先生なんです。ギャグマンガの教員で。

東村アキコ 氏

そうそう、日本を代表するギャグマンガ家ですよ。

おおひなたごう先生、知ってる？（聴講者の反応を見て）結構知ってらっしゃるのね。

高校のときさ、体育のねスポーツテストでさ、知ってる？この話。スポーツテストで砲丸、友達が投げた砲丸が頭に当たって新聞にバーンって載って、で、「笑っていいとも！」に私新聞に載りましたみたいな、素人さんのコーナーに出たんよ、おおひなた先生。その砲丸投げた奴とおおひなた先生と2人で出たんですよ、いいともに。有名な話よ。

吉村和真 氏

ここにそのおおひなた先生の初期傑作があるんですよ、これ『新・河原崎超一郎』って、これ「新」しかないんですよ。「旧」はないんです。そういうマンガなんですけど、ちょっと読んでいってる時間がないのでね、あれですけど、こういう絵柄でシュールなおしゃれなギャグマンガを描かれているのが、この地元の星なので、必ずおおひなた先生の原画もここに。

佐藤真一 氏

地元のね、僕なんか周りにいないんですけど、地元で例えばこういうね、テレビに出たことがあるマンガの先生がいらっしゃるって幸せじゃないですか。いないところが多いんで、それは。

東村アキコ 氏

ここはね、ホントに不思議なところでね、不思議な地域で、マンガ家さんがいっぱい出てるんですよ。こんなとこないんですよ、全国的に。

吉村和真 氏

集中してます。おおひなた先生、矢口高雄先生、お亡くなりになりましたけどね土田世紀先生。

東村アキコ 氏

『編集王』の先生ね。

吉村和真 氏

『おせん』のきくち正太先生って、犬のね、闘犬のマンガね。

東村アキコ 氏

『流れ星銀』の。

吉村和真 氏

そうですそうです、『流れ星銀』の高橋よしひろ先生。

東村アキコ 氏

高橋よしひろ先生、もう名だたるマンガ家が、なぜかこの地域に集中して出ると。

佐藤真一 氏

そう考えると、まんが美術館あってしかるべき場所なんですね。

東村アキコ 氏

私は矢口高雄先生のおかげだと思ってるんですよ、それはね。

私、少女マンガ家でデビューして、少女マンガすごい好きなんですけど、1番尊敬するマンガ家さん誰ですかって聞かれると、私、矢口高雄先生って昔から答えてたんですね。私、子どものときから『釣りキチ三平』とかもちろんすごい流行ってたから読んでたんですけど、もうねホントに小学生のときからマンガ家の中で一番絵がうまいのは矢口高雄先生だっと思ってたんです。いっちゃん絵がうまいと思います。そのダントツで。

でももう、マンガ家さんの中でも絵が誰が1番うまいか論議みたいなことになるんですよ、飲み会で。

論議になると、大体やっぱり絵は矢口高雄先生が1番うまいっていうのは、もうみんな

必ず言うところなんですよね。それやっぱその人間はもちろんですけど、その風景画がねやっぱすごいですよ、水辺の風景画とか山とか、みんなもうご存知だと思いますけど。それで私、ホントに矢口先生のファンだったから、そのさっきのおおひなたごう先生がねギャグマンガ家仲間でしたときに、出身が、俺『釣りキチ三平』のどこ出身なんだよって言ったの。おおひなた先生がね。ええっ？私、矢口高雄先生、ホント尊敬してて言ったら、あっ俺知ってるよみたいなところから矢口先生ご紹介していただいて、からなんとなくこのマンガ美術館とつながりができてきたんですね、私。私、矢口派なんです、完全に。矢口派。

吉村和真 氏

矢口派っていうのあるんですね。

東村アキコ 氏

私、矢口会に入ってる。

吉村和真 氏

矢口会なんです。でも、矢口先生の作品に出てくる風景を僕もちっちゃい頃から見て覚えてたので、横手に来て増田まんが美術館に行って、さわらび荘に泊まるんです。この間に見える風景が、全部マンガとおんなじだと思ったんですよ。あれはびっくりした。

東村アキコ 氏

九州の風景とやっぱ全然違うじゃないですか、『釣りキチ三平』の中の山って。

吉村和真 氏

山も川もね、全然違いますね。

東村アキコ 氏

あっこんななんか山里みたいなね世界が東北にはあるんだなと思って、こっち来たら、矢口先生の絵とおんなじなんです、風景が。それはやっぱ矢口高雄のタッチがいかに正確で、いかに愛してね、山里の風景を先生が愛を込めて描いてたのかっていうのがわかって

ね、すごく感動したんですね、初めて来たとき。

佐藤真一 氏

僕はね、逆にマンガ、小さい頃ずっと読んで、それでやっぱ釣りに走った時期もあったんですよ。すぐ影響されちゃうんで。だけど、その後全然触れる機会がなくて、ここに来て、先生のマンガでなく原画を見たんですね。マンガってやっぱちっちゃいから、なかなかその絵がうまいっていう感覚が、僕はプロじゃないからわからなかったんですよ。

吉村和真 氏

潰れちゃいますしね、印刷の関係で。

佐藤真一 氏

そうそうそう、そうなんです。で、それを原画で見たときに、えっ？これってなんかこんなに絵がうまいってね、うまいの、僕ら美術館とかいろいろ回るんですけど、その中でもこの絵としてびっくりしたんですね。だから、そういうとこでやっぱ原画ってすごいなって感じました。

東村アキコ 氏

私、今ね、なんか最近、日本画、いわゆる昔の日本画の展覧会ブームが去年あってね、東京でなんか有名な日本画のお蔵だしみたいな感じのいっぱいあったんですよ、美術館で。私、誘われたりして行ったけど、どれ行っても、いや、矢口先生の方がうまいんだけどな。

吉村和真 氏

そう、それね、ホントそうなんです。

いや、これね、そうそう、だからマンガという名前がついた瞬間、さっき言ったように、もう身近にありすぎるからわかんないだけなんです。むしろね、矢口先生のような緻密な絵は、パッと見たときに重すぎて飛ばされる対象だったりするんですよ。だからこそ、

その雑誌で読む、「サンデー」とか「マガジン」とかじゃなくて原画そのもので見る機会が1回あるかないかで全然違うんですよ。

東村アキコ 氏

私、なんか矢口先生の原画、初めてまんが美術館で見たとき、もう感動しちゃって何ていうの、その水彩、あれはね何かさくら水彩で塗ってるっておっしゃってましたけど、ご本人は、そのポスターカラーとかじゃなくって。なんかその絵の具のこう混じった感じとか、紙に染み込んでっている感じとかがわかってね、すごい感動したんですよ、ホントに。

吉村和真 氏

しかも重要なのはですね、緻密に描けば美しくなるだとか、一生懸命描けば面白くなるかっていうのは違うんですね。マンガが面白いかどうかっていうのは、例えば、ちょっと失礼ながらね、全然コスパ的にはね、矢口先生は変な話、無駄が多いとかあります。そんなに力入れて描いてどうすんのっていうぐらい描いてるわけですよ。マンガっていうのは、なんかサラッと描ける、ホントに紙にペラッと描いただけでも面白いマンガっていうのはやまほどあるわけですよ。だから、その価値観で商業的に好きか嫌いとか、売れるかどうかとは違う物差しを美術館の原画は持っているはずなんですよ。そういうことも考えていくと、もうホントにこの矢口先生の原画をはじめとする秋田の先生方のものがあるっていうのは、これすごいことですよ。

佐藤真一 氏

ちなみにマンガ家の中でこの人はうまいっていうのって、吉村先生が感じている方ですか。

吉村和真 氏

いわゆる美術評論家の方で、なるほどなっていうセリフ言われた方がいて、さっきの話

と同じなんですけど、今、日本で1番うまい日本画家は井上雄彦先生だって言ってます。

東村アキコ 氏

ほお。この人、ホントですか。誰ですか、その人。

佐藤真一 氏

じゃあちなみに、東村先生この人っていうのありますか？

東村アキコ 氏

いや、やっぱなんか、最高にうまいのが矢口高雄先生だとして、矢口先生と井上先生の間に私は何十人もいますけどね。

佐藤真一 氏

なるほど。

吉村和真 氏

うんうんうん、絵がうまいっていう質問ですか、今のは。

佐藤真一 氏

そう、まあまあ素人なんで、そのうまさもうまく伝えきれないんであれなんですけどね。僕なんか、原画見たときに衝撃受けます。

東村アキコ 氏

でもやっぱり鳥山明先生は、マジでうまいです。あの、3Dっていう概念以前から、紙の中に3Dがあるうまさです。ピクサーとかのああいうアニメ見てて、立体的なのは、すごいね動いてってのを見てても、やっぱ『ドラゴンボール』の1巻のカラーで鳥山先生もうやってたけど？みたいな。

吉村和真 氏

これ、別に持ち上げるわけじゃないですけど、地元で言う土田世紀さんの原画は、ちょっとすごかったです。あのね、同じマンガ家が嫉妬するっていうのが、よくわかりますね。何年か前に横手で見せてもらったときにも、松本大洋さんも非常にその画力で評価されて、海外にもファンが多いんですけど、あの松本大洋さんがホントに嫉妬してた。描け

ないって、どういうふうに描くいうとですね。単に黒いところがありますよね、髪の毛とか。黒いところを単にベタで塗るのか、もう全部線でカケアミっていうんですけど、線一本一本を重ねて黒くしていくかって違うんですけど、これ、原画で見ると、透かしたりするとわかるんですよ。これずーっと手を入れてるんですよ。そのカケアミ方が、もう異常だと。異常なぐらいまいっていうんですよ。だから僕らが一瞬でそれを読み飛ばしてるんですけど、そこにはものすごいドラマがあるんですよ。そのドラマの軌跡みたいなものが原画からじゃないと浮かんでこないものがたくさんありますよね。

佐藤真一 氏

昨日飲んでるときに、そこの飲み屋さんのあれ、店長さんでしたっけ？

東村アキコ 氏

あっなんかサインくださいって店長さんが言って、いらっしやって、もう色紙とかないだろうから、なんかコピー用紙でもあればタラレバ描きますわって言った後に、こんなおっきいね白い皿。

吉村和真 氏

なかなかいいお皿出してくれましたね。

東村アキコ 氏

なんかちゃんとした真っ白いお皿を、これに書いてくださいつつって、描きやすかったあ。描きやすーい皿。

佐藤真一 氏

結構緊張感あって、皿にね、ちゃんと描けるのかなと思ったんですけど。

東村アキコ 氏

色紙より描きやすかったんですよ。

吉村和真 氏

ホントですか。

東村アキコ 氏

その内蔵でサイン会をさ、お皿にサイン会

すればいいんだねとかって。

吉村和真 氏

昨日ね、結構発想として、まずサイン会だになって話をしてたんですよ。そしたら今度お皿でサイン会だなど。

東村アキコ 氏

皿サイン会しましょう。

吉村和真 氏

しかもね、その必要なお金はクラウドファンディングで。

佐藤真一 氏

そうそう。

東村アキコ 氏

クラウドファンディングで。

吉村和真 氏

大体酔っぱらってたのわかるでしょ。どんどんそういう話になっていくんですよ。

東村アキコ 氏

あの蔵ってさ、やっぱさ、まあここだけの話だけどさ、外部の人がさ例えば買おうと思っても、なかなか買えないのはわかるんですけど、もし仮に買おうとしたらさ、すごい高いのかな。

佐藤真一 氏

僕、前に聞いたんですよ。で、値段からいうと、頑張ったら買えそうな値段だったんですけど、まあまあそれなりに頑張んなきゃいけないですよ。だけど、多分あの、ちょっと地域の話をするとな、皆さんに愛されて買わないと、ただモノとして欲しいみたいな形だと、多分あれだめだと思うんですよ。

東村アキコ 氏

でもさ、別にさ、例えば佐藤さんがさ買ったとして、その中でさ、まんが美術館と連携してさ、その原画をね近くで見れる秘密のスペースにしたりとかいう目的があれば、別にさ、まあもしそういう未来にねそういうことがあるかもしれないですよ。

佐藤真一 氏

そうそう、ホントにそれだと僕、絶対買いますから、本気で。

東村アキコ 氏

ホントですか。

佐藤真一 氏

おお、ホントに買う。お金はね、誰か持っているから持ってきますよ。いや、ホントにね、それぐらい価値が、後でね、ちょっと話したいんですけどね。

東村アキコ 氏

だってまんが美術館と、あの内蔵ストリートって、すぐ近くでしょ。なんかだから、あっちのお客さんを蔵の方に、まんがの、だってマンガオタクの私もそうだからわかるけど、子たちって、あのまんが美術館行っても、あの蔵の方に行かないもん。蔵に来てる結構その年配のご夫婦とかも、行かないじゃん、あっちに。だから両方行くようにしたいなと私は思ってるんですよ。

佐藤真一 氏

すばらしい提案ですね。是非そうなるよね。

東村アキコ 氏

私、まんが美術館、今まで何回も仕事とかね、あとプライベートでもさ展覧会、観に行ったりしたけど、あの蔵の通り、私初めて行きましたもん、昨日、実は。

佐藤真一 氏

あっ、そうなんですか。

東村アキコ 氏

通るけど、中でお茶したりとかさしてなくて。

吉村和真 氏

まあホントにね九州の人間からすればね、道歩いてたら普通の家が建つてるとしか見えませんもんね。

東村アキコ 氏

うん、そう。で、その蔵の通りがあるって

いうのはなんか知ってたんだけど、説明受けて。あそこだってわかってなくて、ただのそのなんていうの古い街並みで素敵だなとは思ってたけど。

吉村和真 氏

今、『りぼん』の付録展やってるじゃないですか。あれなんかすごく具体的でね。

佐藤真一 氏

すごいですよね、あれね。

吉村和真 氏

行かれた方、どのぐらいいらっしゃるでしょうね。

佐藤真一 氏

ちなみに、行った方。

東村アキコ 氏

今、蔵ストリートで、昔の少女マンガの付録展をやってるんですけど、蔵の中で。行ってないです？女の人、絶対行った方がいいですよ、すごい懐かしい付録がいっぱいあって。

佐藤真一 氏

その生かし方をね、多分その美術館だけで考えるのか、その地域のほかのものと関わらせてやっていくかっていうのは、ただ地域側もそうですけど、今度そのお客さん側も、なんかそういうとこにね、どんどん関わって行って、元気になっていくみたいなの、ちょっと真面目な話もしつつ。

吉村和真 氏

そうですね、財産ですからね。

佐藤真一 氏

財産ですね。僕はホント、蔵、売ってくれなくていいんで、1泊10万ぐらいで貸してもらって、そのかわりあそこの美術館にある好きな原画をちょっとその期間だけ一日こう眺めながら好きな酒といぶりがっこをかじって、腹減ったら稲庭食ってみたり。

東村アキコ 氏

贅沢です。

佐藤真一 氏

多分同じように考える人ってたくさんいるんですよ。そういうことにお金を使いたい、子どもたちと違ってね、大人の楽しみ方あるのかなという気がしてるんで。

吉村和真 氏

いやあマンガセレブです、それね。

佐藤真一 氏

マンガセレブっていうほどないんですけど、多分そういう使い方をしたいっていうのは、これがね外国人の方たちだったら、多分もう絶対あるんですよ。

吉村和真 氏

海外の方は特にですねマンガの評価を原画で見たいと思ってるんですよ。これは簡単に言えば、アートっていうところにもう自分たち慣れているので、特にフランスの人たちなんかは、だから私たちやってる京都のマンガミュージアムに来るといっても言うんですよ。原画はどこにあるんだ？本物はどこにあるんだ？って言うんですよ。いやいや本物は売ってるマンガだけどっていうと、ちょっと違うんだよって言うんですね。この感覚の差は。

東村アキコ 氏

日本って、浮世絵とかも全部版画でしょ。紙に描いてきたでしょ。でもさ、西洋っていうのは、アートっていうか絵のスタートって、教会に飾る宗教画が絵のスタート、始まりなんですよね。教会に飾るから、100年、200年、300年、残らないといけないっていう考え方だから、そのキャンバスとかね木の板に絶対剥がれないように、ニスみたいなもので固めて固めてという、残すっていう考え方なんですけど、日本は紙文化だから、紙って残らないんですよ、結局、虫にも食われるしね。だからよくさお寺でさ屏風が見つかったあの、洗濯物を掛けてたような屏風が実はすごいやつ

だったとかってあるんですけど、枚数をだから、浮世絵も版画で何十枚かその刷り師が刷って、売って、版木なんかもう潰れるじゃないですか。マンガも原画っていうのは、その版木みたいな扱いなんですよ、今。でも、私はマンガ家だから版木でいいじゃないかと思ってる派なんですけどね、なので、変にこう海外の人がね結構最近、原画をね、日本の原画をヨーロッパがね欲しがってるとかね、売ってくれとか言うのは、私はいやあ売らない方がいいんじゃないかなって思っている方なんですよね。だからその、あくまでも版下としてみんなになんとかなく、でも生で見たい人には気楽に見せれる方がいいかなって思うんですよ。

私なんかその、金沢美術大学というところの油絵科のときに油絵の成り立ちから読まされるでしょ。私、全く向いてないなと思って、それ読んだとき。

吉村和真 氏

いやいや、それ生きてるなと思いますよ。

東村アキコ 氏

でもさ、何百年残すみたいな発想ないし、やっぱマンガ。描いてさ、本になっちゃったら、もう見たくないんですよ。だから原画がね、いっぱい余っていると思う、今。

吉村和真 氏

そこで聞いてましたけど、佐藤さん言われたその美術館っていう名前で、だけど一般的な美術館とまんがの美術館と何が違うかって話に多分つながっていくでしょ。

佐藤真一 氏

そうそう、この後ちょっとそっちに、ここまでで何かせっかくなんで、ちょうど今半分ぐらいたったんで、まだまだ続くんですけど、さっきのマンガ家になりたい方でも結構ですし、それ以外にも、特に先生含めて質問という方いらっしやったら・・・割りと大人しい

方たちが多いですけど、いないですか。せっかくなんで先生に、僕ら気遣いだから、なかなか直接会話とかできないじゃないですか、ファンの方。じゃあどうぞ。

質問者Aさん（女性）

先生、今日はありがとうございます。今日来られるかどうか、仕事大変だったので、昨日の接待でのお手伝いに行かせてもらいたいくらい悩んでましたけども、今日来られてよかったです。

先生、今日のお客さんの入りはどう思われますか。私は、もう何ていう、もっと横手市の総力を挙げて、座れないくらい呼ぶべきだと思って。

東村アキコ 氏

結構後ろ（が空いている。）

質問者Aさん（女性）

予想どおりな感じなんですけど、これが私は課題だと思ってます。

東村アキコ 氏

ああ、素晴らしい、さすが。

佐藤真一 氏

ああ、なるほどね、素晴らしいね。

東村アキコ 氏

うんうんうん、そうですね、まあ確かに夏休みですしね、なんかこう、私、でも結構ティーンに人気がないんで、アラサー世代には人気あるんですけど、中学生、高校生に人気はないんじゃないんですけど、そうですね、結構。

佐藤真一 氏

でもね、僕ら全国でこういうのやってるじゃないですか。でいうとね、テーマによるんですけど、多分、今日月曜日。

東村アキコ 氏

あっ今日、月曜日ですね。

佐藤真一 氏

皆さんが参加しやすいね曜日とか、それから月末、月初とかね、それから時間帯とかあ

るので、個人的には結構なんか入ってる気もしてるんですよ、そういう意味では。

東村アキコ 氏

でもね、本当そうだと思います、私も。

佐藤真一 氏

今後の話につながるいい質問だったと思うんですけど、実は観光でも何でそうなんですけどね、意外と地元の人が地元に関して楽しんでないんで、外から見ても魅力的に見えないと、これよくあるんですよ。地元の方が、近い人が喜んでないのに、遠くの人に、例えば行政がお金かけて美術館ありますよってPRしても、絶対に人はやっぱり来ても地元で盛り上がってないねってなっちゃうんですよ。だから、もっともっと地元でね盛り上がってくると文化になってくるし。

吉村和真 氏

ですからそれは僕の立場から言うと、さっきのマンガを描く、読む以外に、マンガを通じて人がどう接するかっていう話の課題なんですけど、1例だけ言うと、うちのマンガミュージアムでですね、アキコ先生も含めていろんな。

東村アキコ 氏

京都にもマンガミュージアムがあるんです。

吉村和真 氏

はい、京都にマンガミュージアムを創りまして、先生方を呼んでいろんなトークショーとかやるんですけど、大きな声で言えないけども、子どももいますけどね、さいとうたかを先生、あれだけビッグネームの方をお呼びして。すると、目の前で座って『ゴルゴ13』を読んでいる子、若い人たちがいて、もう絶対喜ぶだろうなって思うじゃないですか。でも、さいとう先生見てもね、ゴルゴの方しか見ないんです。ここに本物がいるのにとかって、絶対ね声かけに来てくれるだろうと思っ

たら来ないんです。だから、マンガは好きだけど、別にマンガ家とどう接していいかわからないとか、あるいはマンガは好きだけど、何か文化というのが何かピンとこないとか、そこの部分は別に多分この地域の特色だけじゃなくて、全国的にそうなんです。そこが最初に言った身近すぎてわからないマンガとの付き合い方みたいな話になっていくんですよ。プラス地元の、この地域の特徴っていうのは、当たり前ですけど僕らみたいな外から来た人は驚きですけど、こっちの方は当たり前なので、これを気づかない。このだから2つのね気づきにくいものを、どうやって掛け合わせるかって、実はすごく大変なんです。難しい問題なんですよ。

佐藤真一 氏

ほかに何かありますか？もう一方くらいちょっと聞いてみたいと思いますけど。いないですか。

質問者Bさん（女性）

『東京タラレバ娘』が大好きで見てたんですけど、担当の人がいるじゃないですか。東村先生のマンガって、いつも裏切られ、裏切られていくんですけど、こっちはハッピーで終わってほしいなと思ってても、どうしてこんなに裏切ってくれるのって思うんですけど、やっぱりあれは担当さんと話しながら決めていくんですか。

東村アキコ 氏

うちはもう担当さんは、私が好き勝手描いて、担当さんが、どっちかっていうとね微調整じゃないんですけど、伏線回収を忘れるなっていう指示がさきに、伏線回収っていうのは、例えば、前この子が、私昔こんなつらい思い出があったけど今は言えないとか言ってるのを、後でマンガで言わなきゃいけないじゃないですか。だから、映画とかでもよく伏線って言うでしょ。それってなんかね、伏

線張るって言うんですけど、業界用語で。伏線を張ってもね忘れちゃうんですよ、やっぱなんか私ばかりだから。そういうのを担当さんが、これ回収してくださいね、これ回収してくださいねっていう指示はあるけど、内容のもっていき方とか、その裏切り、裏切っていく、どんでん返しとかは、もう作家が好きにやって、担当さんはそれを許して下さっているという感じですね。意外と。話でつくってるところもあると思うんですけど、私も、割と好き勝手にやっちゃうタイプなんで、だから量産できてるというところもあるんですけど、えっ何か裏切りとかありましたっけ、タラレバ。

吉村和真 氏

すごい気になりましたね。

東村アキコ 氏

ハッピーエンド、ハッピーエンド、ハッピーエンド？あれ？ハッピーエンドみたいな感じだよ。私はなんか結構ハッピーエンドだなんて思ったんですけど、うん、どこだろうな…、あれか、うまくいきそうだけどズバンっていかないみたいな、倫子を応援して下さってたってことですよ。幸せにしてやるもんかっていう気持ちで描いてた。意地悪心か出ちゃって、もう…。

佐藤真一 氏

もう一人、是非是非。

質問者Cさん（女性）

私、東村先生が大好きだとおっしゃっている矢口高雄先生の出身校の増田高校出身でございます。

東村アキコ 氏

あつ、出身、優秀。

質問者Cさん（女性）

いや、ただその自分が増田高校入ったときは、全然その矢口高雄先生が出身校だったっていうことも知らなかったり、『釣りキチ三

平』のことも全然知らなかったんです。全くよく全然知らなくて、その蔵の通りとかも、通学だったり高校卒業してからも通勤でしか使ってなかったりで、まったくもってもう全然わからず、今、ちょっと東京で原画展行ったりとか、好きでよく行ったりとかして、そうするとやっぱり知ってる人からは、矢口高雄先生の出身校だよって言うこと言われて、地元のこと全然話せなかったことがすごく恥ずかしかったっていうことがあって、何かその何だろう、その自分の地元をもっと愛する気持ちをどうやったら培ってあげたいかなって言うふうになっちゃってしまいましたってことがあります。以上です。

東村アキコ 氏

まんが美術館がそれとさなんか、何ていうの、みんなのそういうこれからのさ若い子たちの、リニューアルオープンいつでしたっけ。

吉村和真 氏

平成31年ですね。

東村アキコ 氏

ああ、もう結構すぐなんですね。じゃあね、そこで例えばだけども、小学校の社会見学とかも受け入れてらっしゃるんでしょう、今までもそういさ、なんかもう学校ごとに行っちゃみたいになってあります？そういうなんかカリキュラムとかがあると。

佐藤真一 氏

いいですね、そういうね、地元の方が。

東村アキコ 氏

いいかしらないですね。

吉村和真 氏

美術館見学っていうのはね、普通にある中で。

東村アキコ 氏

やっぱさ、美術の、横手のさ美術の先生が、やっぱ矢口高雄の画集とかさあるじゃないですか、いろいろそのカレンダーとか。美術の

先生がやっぱ矢口先生の蛭雪時代とかを全員必読書として読ませ、この人が1番うまいし、こんなふうな風景を、地元の描いているのがあるんだ、いらっしゃるんだっていうのを美術の先生からいってどうですか。なんか洗脳っていうか、矢口高雄洗脳していきっていくか。

吉村和真 氏

矢口組の神みたいなの。

東村アキコ 氏

私はもう矢口組の長として、そうですね。やっぱりきっかけは図工の時間じゃん、全ての基礎って、子どもって。

吉村和真 氏

そうですね、ちょっとここで挟むとですね、ホントに今全国で、小学校だったら図画工作、中学校だったら美術で、先生が実際少なくて困ってるんですよ。結局それで美大の方、その小・中学校ぐらいの教育にマンガをきちんと入れられないかって思ってるところがですね、自治体さんとかでちらほらあるんです。

佐藤真一 氏

すごいですね。

吉村和真 氏

これは何か面白いマンガを描くというよりは、コミュニケーションツールとしてマンガがどれだけ役立つか、自分の言いたいことを相手に伝えるのに、どれだけ便利かっていうことを前提に考えられているんですよ。

佐藤真一 氏

いやあそれね、是非ねやってほしいなって、僕、大学まで行っているいろいろ勉強しましたが、たいした役立ってはないんですよ、正直。それよりもマンガでね育ったじゃないけどあれだけ読んできて、いろんなものに影響受けていて、その学校教育にマンガってね、マンガを描いた人がするって出てくると、ただ絵を描くとはまた違うじゃないですか。深いで

すよね。

デザインとかね、すごくクリエイティブな部分なんで、それなんかちっちゃい頃からマンガを描くのをやっておくと、クリエイティブな頭をつくれるんじゃないかって、ちょっと堅い話ですけど、もっといってそういう教育の力が入ってくるとね。

東村アキコ 氏

図工の時間でさ、別に年がら年中マンガを読まなきゃいけないわけじゃなくて、なんかこれやんなきゃだめ？みたいなやつあるじゃん。紙粘土でさ、なんかガラスの瓶に張り付けて花瓶とか、あれ必要？あれ？って思うんだよね、私なんかもうさ、息子がいるんですけど、息子もさ美術でさ紙粘土で友達顔をさ作ってって、これやんなきゃだめかな、学校でみたいな。

吉村和真 氏

それやるとたぶん2時間ぐらいかかる。

東村アキコ 氏

マンガ読んだ方が、なんか将来さ、WEBサイトの会社で勤めたときとかに役立つとかしんないじゃんとか思うんですよね、これからの時代は。

佐藤真一 氏

だからそういう意味で、何かそういうね、どこまで広がっていくと、また違った意味で文化のね側面が入ってきて、また町として何かその深さが出てくるなみたいな。

吉村和真 氏

もともと数年前に20周年記念のこのまんが美術館のイベントで呼ばれたときも、矢口先生とお話をさせていただいたんですけど、やっぱり何で原画を集めたのかっていうのを聞いたときになるほどと思ったのは、本物をとにかく見せて美術教育に使ってほしい、とにかくそういうものとして1回マンガを見てほしいっていうことをおっしゃってたんです

よね。だから、そういうことができる場所があるっていうのは、僕らからすると、この上なく贅沢な場所だと思いますよ。

佐藤真一 氏

その中でね、ちょっと後半、マンガ文化を生かすって話なんですけど、美術館っていうところにちょっとフォーカス戻したいんですよ。さっき吉村先生話したとおり、各地にたくさんマンガ文化を生かした施設が出てきて、70ぐらいあるんですけど。

吉村和真 氏

そうですね。

東村アキコ 氏

私、京都とことぐらいしか知らない。

吉村和真 氏

個人のマンガ記念館が多いんですよ。

東村アキコ 氏

あっ手塚先生のとこと水木しげる先生のこと。

すごくいいですよ、京都のマンガ美術館も。

佐藤真一 氏

そこもすごいですよ、また全然ね違った意味で、僕も京都、仕事行ってきましたけども通っちゃいましたからね。それぐらい魅力あるんですよ。今回ここは、あえて美術館ってね、ここに差別化のポイントを置いてて、珍しいと思うんです。これ何で美術館ってつけたんでしたっけって話、先生ご存知ですか。

吉村和真 氏

先程の原画を集めるというコンセプトと、この美術っていうのがですね、一致してたんだと思いますよ。普通のマンガ館で、特に矢口先生の名前が出ますけど、個人の記念館を創っても、ちょっと言葉悪いですけどやっぱりずっとね残すにはなかなか賞味期限みたいなものがあるって難しいですよ。手塚治記念館ですら、なかなかそのねずっと人が来るわ

けじゃなくて、いろんな企画で回していかなきゃいけない。そうなったときに、個人の記念館じゃなくてマンガ総合的な美術館を目指そうというコンセプトは、もう真っ当で、ある意味で早過ぎたんですよ。

佐藤真一 氏

すごいコンセプトですよ。早いんですよ、そもそも。

吉村和真 氏

取り組みが早すぎたんですよ。だから、どんなにすごいところがあるかっていうのを、よく使う僕らが理解して、これに追いついてきたぐらいのときに今回のリニューアルなんですよ。

佐藤真一 氏

ちょっと全然真逆の話なんですけど、僕衝撃を受けたのは、フランス映画、向こうのマンガ自体を国がですよ、国が認めてルーブル美術館がマンガに扉を開いたみたいな話が始まったときに、結構やられたと思ったんですよ。僕の中でマンガっていうのは、日本の文化で、完全に日本のものだと思ってたんで、向こうには向こうのマンガがあるらしくて、というような話を先生にしたかったんですけど、これってどう捉えられます？お二方。

東村アキコ 氏

なんかこの噂は聞いてて、ルーブルがマンガの収蔵を始めたっていうのは、聞いてたんですけど、これルーブルの、あの巨大な美術館の中のどこにあるんですか、これ。隅っこのプレハブみたいなところでやってるんじゃないの。

吉村和真 氏

当たらず遠からずです。

東村アキコ 氏

でもそんな感じやろ？なんかさ、離れみたいなとこでやってるじゃないですか。

佐藤真一 氏

ただまあ、世の中的にこういうことがあると、今日多分行政の方もいらっしゃると思うんですけど、日本の方も含めてね、ちょっと慌てるわけですよ。

東村アキコ 氏

原画の取り合いみたいになっちゃうからね。

佐藤真一 氏

そうそうそう。だから、この話をこれ以上するつもりはないんですけども、でも吉村先生、どう受け止められています、こういうの。

吉村和真 氏

実はね、この前からルーブルの企画に関わってたんで知ってたんですけど、さっきの話と同じなんです。海外、特にフランスは、とにかく原画が1番価値があると思ってるんですよ。だから、売れたマンガが出てきたら、その原画をまずキャッチしろっていうぐらいの感覚なんですよ。その原画に価値を見出すということは、長い物語でマンガを評価するんじゃなくて、1枚の絵のすごさで判断するっていう物差しなんですよ。だからこういうところに結びつくんですよ。でも僕らは、一枚一枚一生懸命読んで、そのマンガの絵に感動するっていうのは、さっきのねアキコ先生みたいな矢口先生の風景に惹かれたとかいうことはあっても、そんな一般的じゃないじゃないですか。だからね、この差は何ていうかな、美術館にマンガを入れる意味についてどう考えるかとか、それをどういうふうに展示するかっていうところに明確に差が出てくるんですよ。これはね、ただね、どっちがいいか悪いかって話じゃないんです。その違いをまず知っておいた方がいいですね。すぐこっちにこうやってもっていきたがるんですよ、もうフランスは。

東村アキコ 氏

じゃあルーブルのさ、お客が減ってるんじゃないんですか。ちょっとテコ入れにさ、ちょっと変わったことしようぜみたいな感じではないの。

吉村和真 氏

それもね、あるんですよ。僕らルーブルじゃなくてポンピドゥーセンターっていうのがフランスのパリであるんですよ。世界三大現代美術館の一つなんですけどね、そこでマンガのワークショップとかやったんですよ、実は。そしたら、すごいやっぱりやってきて。

佐藤真一 氏

そういう意味でね、ちょっと文化的なものを感じるの、どうかなって話なんですけど、その中で今まさにあるんですけど、ここの話ちょっとして、行った方多いと僕は思ったんです。少し先生から、ご紹介も含めて。

吉村和真 氏

うちの京都国際マンガミュージアムでやったんですけど、小学校をリノベーションして、このマンガミュージアムにしたんですよ。僕ら実はですね、これもものすごくいい場所にあるんです。いわゆる地下鉄が十字で交わっているところにこれあるので、立地条件が最高なんですよ。何で京都にマンガなの？って言われるんですけど、さっきの『鳥獣戯画』とかなんとかねいろいろあるかもしれませんが、そこは置いといたとしても、今ですね、とにかく海外のお客さんが京都に山ほど来るわけですね。その人たちが、ここめがけて来てくれるんですよ。それで、マンガの本場を、日本の中のさらにその本丸を観に来るみたいな感覚で来るからこそ、何で原画がないんだって言われるんですよ。

佐藤真一 氏

その人たちって、秋田に行ったらありますって言ったら、来てくれますかね。

吉村和真 氏

最初から知ってれば、秋田・京都ってツアー組むと思いますよ。

佐藤真一 氏

組みますよね。

吉村和真 氏

組みます、組みますこれ冗談抜きで、今、主流のツアーはですね、アキバで今のマンガのキャラクターグッズに触れて、京都でマンガの歴史に触れて帰る。その逆パターンっていうのが定着しているんですよ。ちなみに言いますが、うちはですね、今、年間30万人のお客さんがお越しになるんですよ。そのうちの4万人ぐらいが海外のお客さんです。

佐藤真一 氏

そんなにいます？

吉村和真 氏

はい。平日なんかは、ほとんど海外の人たちが中でマンガ読んでますよ。

佐藤真一 氏

実は、僕もこれ知ったのは、実はその30万人来てる施設っていうのは驚かないんですけども、外国人の方がそれだけ来ていて、京都の中でも特別なんかそういうのが来てる感覚があったので、ニュースで知って行ってみたんですけど、やっぱりそのときになんか、ミュージアムって書いてありますけどね、外国人多分好きだろうなっていうのは、その校舎を使っているのも含めて思ったんですけど、ここの美術館と、またどう違うのかなみたいなところが。

吉村和真 氏

そうですね、はいはい。うちはもうホントにマンガ、雑誌、単行本でもう占めているのと、あとね、これも多分地元の人のお話になると思うんですけど、僕らここにもともとマンガミュージアム創りたいって言ったときには、もう大反対されました。

佐藤真一 氏

そうですか。

吉村和真 氏

京都の地元の強さっていうのは、ホントここだけの話にしてほしいんですけど、もうちょっと洒落にならないんですよ。

佐藤真一 氏

なんとなくね、わかりますよ。

吉村和真 氏

もう間に合ってますっていう感じなんです、最初はね。そこから何とかいろいろやりながらですね手を尽くしたんですけど、あるお偉いさんがですね、何で京都にマンガなんか、うちのねこんな大切な学校をマンガなんかに貸さないかんのやって激昂されたんですよ。実はですね、京都っていうのは、さっきもちょっと言いかけてましたけど、やんわりとお断りするのが普通なんです。「検討してきます」とか「なんかちょっと考えてきますわ」って言ったら、もうノーっていう意味なんですけど、そのやわらかくじゃなくて気が向かれたときに僕らうまいこと、スッと入っていったんですよ。じゃあ何でそんなにマンガに怒るんですか、マンガのことがね、何でそんなにマンガを目くじら立てるのかどうかぐらいの話から、実はここからうまいこと会話ができていったんですよ。今はもう完全に地元の方々のお力添えあってなので、実はそのコミュニティ機能として夕方になったらここでゲートボールの練習とか、野球の練習とかもしてもらっていますし、地元の方々も、これとともに小学校だから卒業生のおじいちゃん、おばあちゃんとかもたくさんいて、イベントのたびにやってきて机拭いてくれたりする人とかいらっしゃるんですよ。

佐藤真一 氏

地域に溶け込んでいる感じはあるんですね。

吉村和真 氏

もう、そうです。最後に地元の方に言われたオーダーが、子どもたちが帰ってくる場所にしてほしいって言われたんです。もともと小学校だから。ちょっと長くなって申し訳ないですけど、僕がここでマンガミュージアムできて良かったと思うのは、小学校だから昔からですね多分何人も何百人も、マンガ呼んで怒られてきた人がいっぱいいると思うんですよ。その人たちの怨念がね、パーッと晴れたみたいな、ホントに、学校でマンガが読める幸せみたいな感じなんですよ。

佐藤真一 氏

アキコ先生、どうですか、こういうマンガミュージアム。

東村アキコ 氏

なんか私は、原画にそんなに執着がないタイプなので、それは作家だから。ここは原画というよりも、そういう歴史みたいな感じで、ちょっと博物館的に昔の雑誌とかあるのがすごい好きで、すごい面白いなと思って、図録とかもすごい素晴らしいし、あと結構ね、少女マンガに強いんですよ、こっちは。それがすごい特徴的だから、女の子でマンガ、昔の少女マンガの絵ってすごいじゃないですか。なんか塗りとかも色とかも。だから、京都ってみんな何かした旅行に行くじゃん、女の人って。そうしたときに結構寄ると、すごいいいなって思います、女性の方に。

吉村和真 氏

ちょっとだけね、その紹介と、実はこの後の話につなげたいので、うちの取組の紹介したいんですけど、原画を実は僕らも扱っているんですよ。ただそれはですね、大量保存しているというよりも、原画'（ダッシュ）'っていう面白い試みをやっています、この辺はホント懐かしい作品なんですけど、松本かつち先生っていう『クルクルくるみちゃん』っ

ていうやつは原画で、こっちが「原画」、その上田としこさん、松本かつち先生のお弟子さんだったんですけど、の絵なんですけど、これ何が言いたいかというです、僕は今、うちの学長はですね竹宮恵子っていうマンガ家がやっているんです。その竹宮さんがですね、自分が影響を受けた少女マンガをやっぴり世の中に残したいので、その原画を借りてきて、本当に色合いの、もう微妙なところまで複製してですね、もう1枚の原画と呼ばれるぐらいの存在にしたいというので「原画」って名前つけたんですけど、その「原画」を作って、これを保存しているんです、実は。

東村アキコ 氏

スーパーオリティが高い本物と同じ方法と紙で作ったスーパー複製原画っていうことなんです。

吉村和真 氏

そうです。ありがとうございます。いっぱいつけてもって来て。こうなるとね、どう何ができるかという、本物は汚さなくていいので、この「原画」を使って海外で展示したり、出版だってできるんですよ。この話は何かという、だから原画をどう活用するかという事例で紹介しているだけなんですけど、これまたちりも積もればというあれなんですけど、もうずっとやっているのもういまや700点ぐらいこの「原画」が、もううちにあるんですよ。これを海外の方が喜んで、さっき、なんで原画がないんだって言った人たちも、これ見て喜んでるんですね。

佐藤真一 氏

それだけクオリティの高いものが、もうできる世の中になったんですね。

吉村和真 氏

できる世の中になりましたね。だから、こういうのを通じたり、さっきアキコ先生に

言ってもらった少女マンガに強いよって言われたうちの 하나가、実は今その蔵でやっている、あの『りぼん』の付録展だったりするんですよ。だからもう横手の観光は、役割分担しながら、実はすごく連携をもうやっています。だから京都と秋田と横手と一緒に楽しめる。

佐藤真一 氏

ライバル関係というよりも、そうやってなんか差別化を図って、ファンがぐるぐる回遊するのが多分1番なんかこう、いい感じがするんですけどね。

吉村和真 氏

そうですね。全然ライバルとは思ってないです。むしろ僕らが学ばなきゃいけないこと多いので、本当に海外からお客さんが来るときに、秋田、京都、もうマストだねって思わせれば、いいわけですよ。

佐藤真一 氏

先程からちょっと話出てる、最後、ちょっと原画の方の話をもう1回ちょっとしておかないと、差別化のポイントになるので、ここにちょっと出てますけど、なかなかそうは言っても、さっき70の全国にある施設もなかなか運営がねそう簡単じゃないという中で、美術館自体は、大体行政がお金突っ込んで、もうほとんど回収できないまま、皆さんの税金が突っこまれて回してるんですね。

吉村和真 氏

黒字のどこなんか、ほとんどないです。

佐藤真一 氏

ないですね。黒字を目指す必要はないと思うんですけども、ただやっぱり回していくには金かかるものはかかる中でいうと、やっぱりたくさんのお客さんに来ていただいているのは地域にとって良いことなので、ただの観光とかじゃなくて、そういうものを受け入れていくには、やっぱり今回その、この場

合は美術館にある原画ってどう使っていくかということなので、ここを再度少し掘り下げて話を進めたいんですけども、そのときに、さっきから原画そのものの価値っていろいろ出てるじゃないですか。ちょっと僕お聞きしたいのが、さっきアキコ先生は原画に執着がないっていう話もありながら、ファンから見ると、例えば作家の方が、もうあれはいらないわって言ったら、権利とか別として、ファンからしたら欲しいみたいな感覚があるので、大切な宝だと思う人もいると思うんですけど。

東村アキコ 氏

作家は、みんな押し入れに突っ込んでます。

佐藤真一 氏

突っ込むんですよ。

東村アキコ 氏

私だけじゃない。みんなです。知り合いのマンガ家の家に遊びに行くと、玄関にさ、ネットで買ったたまねぎの箱とかさ、サイダーのさ、あれとかといっしょに横にバーッとカラーの原画が積んであって、バーッと見たらさ、よく見てた絵のカラー原画なわけ。で、えっこれどうしたの？て言ったら、なんかもう先月、出版社からお戻ししますって行ってきてさ、こんなやつが、置くとこねえからそこに置いてんだよっつって、玄関先のさ傘差す横で、もう水滴垂れているようなとこに、そんなもんですよ、マンガ家からすると。だからお宝ってことですよ。

佐藤真一 氏

そうそう。

東村アキコ 氏

マンガ家がみんな大体こうしているわけじゃないからね。

佐藤真一 氏

そしたら、なかなかね、もうどうしようもないもんだと思っちゃうから、それがもらえ

ないかなど、もらえなくてもね、じゃあちゃんとしてみたいなとも考える人もいると思うんですよ。一方で、ちょっとあれすればね、ちゃんとビジネスにいいじゃん考える人もいると思うんですけど。

東村アキコ 氏

前さ、だから京都のマンガミュージアムで展覧会やるから原画貸してくださいっていらっしゃったのね、吉村さんが。初対面のときかな。そのとき私、ああいいですよっつってさ押し入れの戸開けて探したの。

吉村和真 氏

先生、何探してるんですかって。

東村アキコ 氏

押し入れの中からカラーの原稿出して、はい、はい、はいって言って紙袋に入れて、はいって言って渡して帰りました。すごい後で秋田でまんが美術館でその話したら、すごい、いやあだめです、そういうのはって言われた。

吉村和真 氏

ちょっと待ってって押し入れ行ったときには、何か原画を隠している隠し金庫の鍵でも探すのかなって。

東村アキコ 氏

押し入れガラッと開けたらさ、突っ込んで、もう開け閉めするたんびにさ、何ていうの、襖のさ縁が原画の角にガンガン当たってるんです。

佐藤真一 氏

うわあもったいない。

吉村和真 氏

そうです、もうだからね、これ誰が見ても原画じゃないだろうっていうような袋で持って帰ったんで安全でしたけどね。

佐藤真一 氏

そういう意味でね、美術館って名乗ったところにね、そういう原画っていうのを置くっ

て考えると、僕らなんかそういう扱いをされていること自体がなんか不思議でしょうがないんですけども、でもそれが現状っていうことですよ。

東村アキコ 氏

だから私、矢口先生をすごいリスペクトしてるから、矢口先生のまんが美術館を観て感動して、もう原画全部うちにね收藏っていうか預けませんかってお話いただいたとき、あっいいっすよみたいな、あああれだ、矢口高雄先生と東京で一回お食事をさせてもらったのね。お寿司屋さんで、矢口先生んちの近くの。そこで確か矢口先生が、アッコ、アッコさ、マンガの美術館あるから、増田にあるから、そこに原画全部預けてよって言われて、私、はいつて言って、それで全部預けちゃったの。だから、うち1枚もないですよ。全部勝手に預けてる。

吉村和真 氏

この話、今日のメインだと思うんですよ。皆さん知らなかったら、多分びっくりしてると思うんですけど。

東村アキコ 氏

矢口先生に言われたから全部預けたの。

吉村和真 氏

いや、これ、ちょっとだけ偉そうな解説を入れるとですね、大手のプロダクションを持ってるぐらいに人気作家さんは、もう自分たちで保存するわけですよ。でも、1作当たったけど、その後なかなかとかいう先生たちの方がむしろ多いので、この原画どうしようって悩んでいる人たちは山のようにいるんですよ。でも一方で、アキコさんみたいに、もうバリバリ描いてる人が原画を預けるなんてことはないんですよ、まだ。

ないんですよ。ホント、初のケースにして、恐ろしいケースがこの今、横手で起きてる。

東村アキコ 氏

モニターなのよ、私、まんが美術館の。ダイエットで、なんかモニター2カ月で痩せましたみたいな感じの。

吉村和真 氏

そうそう、預けた原画がこうなりましたみたいな。

東村アキコ 氏

原画でまんが美術館でいろんなことができる可能性をさ、探っていくわけじゃないですか、これから。

緊張するけど、まあ私のいろいろプランちょっとね、やってみてくださいよっていう気持ちで預けたのもありますし。

吉村和真 氏

矢口組はきっぷがいいですね。

東村アキコ 氏

矢口組、ちょっとこれから増やしていこうと思ってるの、私。

吉村和真 氏

でもね、こういうケースって本当に珍しくて、先程の70ぐらいあるうちの数十館が原画とか関心持ってるんですけど、それはやっぱりそれぞれの地域に縁があって、出身者だとか、そこで何かちょっとねいろいろあったっていうので入ってるんですよ。宮崎の出身の東京でバリバリ描いてる現役マンガ家の原画が、何で横手にあるんだって話になるじゃないですか。

佐藤真一 氏

九州からしたらね、宮崎に置いてくれればねとかね、そう思っちゃうわけですけど。

吉村和真 氏

そうです、そうです、ホントそうですよ。だからそうやってマンガ家がそういうふうには原画をここに預ければ、こんなふうにしてもらえるんだっていう先行モデルになってもらえれば、ものすごく可能性が。

東村アキコ 氏

管理できる人ってさ、マンガに詳しくって、何ていうんだらう、マンガを要するに愛しててっていう人じゃないと、やっぱこっちも預けられないじゃないですか。それが結構おっさきい。人なんですよ、結局。

吉村和真 氏

それはかなり重要。そうです。

東村アキコ 氏

やっぱマンガ美術館は、ここのマンガ美術館は、やっぱ矢口先生の何ていうそのチームがね素晴らしかったんで預けれるって思って預けたんですよ。

吉村和真 氏

スーパー学芸員がいますからね、ここは。

それをどう育てていくかっていうのは、僕ら大学の役回りでもあるんですよ。だから、今もうほとんど答え言われましたけど、どういう活動するかっていうのは、プランはいろいろなものが出てくるんです。だけど、結局それを扱える人、そこに預けてもいいよって安心して渡せる人がいないとだめなのと、この人に預けてたら危ないと思わせるマンガ家がいるっていう、あの押し入れの中に入れてくぐらいだったら。

東村アキコ 氏

やっぱさ私思ったけど、さっきのさループルのやつ見て思ったけど、やっぱさループルみたいにあんなうやうやしくさ飾ってんのはさ、なんか違うような気がする。なんかやっぱ、やっぱねアートじゃないっていうギリギリのラインがカッコイイと思う。

吉村和真 氏

そうです。後生大事に自分の原画一枚一枚抱えているマンガ家はカッコ悪いっていうのと多分同じなんですけど、でもね、ここがホント面白いのは、ということはずです、僕らがやろうとしているこのプロジェクトという

のは、実は美術館が問われるんですよ。マンガが問われるんじゃないですよ。

美術館ってなあに？って話にいくんですよ。だから、僕らマンガで大学でやってますけど、最初言ったじゃないですか。なんでわざわざ大学でマンガのことやるんですかって言われてるけど、それはマンガじゃなくて大学が問われるんです。大学って何する場所なのって、本質的なことを言われてるんです。

佐藤真一 氏

何かねわかかってきたのはね、難しいを新しいに変えるって言ったじゃないですか。多分これ、美術館とか原画ということをやっぱり語っていくとね、結構難しいって行き詰まってる、多分皆さんチャレンジしてないんですよ。ところがね、これだけ今回こうチャレンジしてもらって、そうなってきたときに、なんかさっき吉村先生おっしゃった美術館そのものが問われてね、変わっていくことによって、また美術館そのものがということで、マンガが結局、日本の美術はね、文化はね、みたいな。これカッコイイっすよね。そうなったらね。

吉村和真 氏

そうそう。だからアキコさん言ったように、アートの枠で、アートの物差しでマンガを測るようなカッコ悪いことはしたくないですね。じゃあどんな物差し作るのっていう話ですよ。

東村アキコ 氏

その物差しは、全く私思い浮かばんけど、やっぱそれは美術館の人とかが考えてもらってっていう感じなんですよ。

佐藤真一 氏

僕、原画ってね、ちょっと話を少ししたかったのは、もちろんマンガの走りって言われてますけど、今これほとんどこういう浮世絵って4分の3以上が欧米の方の美術館に飾られ

てるんですね、これは美術として。最初のってこれ、もともとあのね。

東村アキコ 氏

これね、有名な話ですよ。包み紙。

佐藤真一 氏

そう、包み紙だったって。

東村アキコ 氏

知ってた？陶器の包み紙にしてたんだよ、浮世絵を。

佐藤真一 氏

有田焼とか、ああいうのに。

東村アキコ 氏

要するに刷り損じとかだと思うけどさ。

佐藤真一 氏

それを見て、これは、多分アートと思ったんでしょうね。もう全然違った角度から見たものが、今もうこうなって、なっちゃってるっていうか、そういう意味でいうと、アートにするつもりはないにしても、実際、昔そういうことが起きていて、コンテンツになっているので、何かその使い方が変わるんじゃないかなというふうには思ってるんですね。

それで、昨日の話なんですけど、この、ちょっと蔵に戻るんですけどね、やっぱりどう使っていくか、もちろん美術館の方たちが考える部分なんですけど、蔵そのものをなんか活かさないかの話、さっき例えばアキコ先生のマンガとか全部あると、じゃあ全部読めるわけじゃないですか、原画見ようと思ったら、大変ですけど、美術館の方たちは。原画でマンガを読むなんていうことがもしできたら、ちょっと特別じゃないですか、それって。

至福ですよ。だから、みんなが見れるコミックで見るとか雑誌見るんじゃないくて、原画で、その先生の描いた原画でそのマンガを読めるって、これ多分僕だったら1カ月ぐらい籠もって、しばらくそれに浸ってみたいって考える人が、僕だけじゃなくて多分いると

思うんですよ。そういう方が来てくれれば、これは活性化につながるんですね。

吉村和真 氏

その辺、アキコさんに聞きたいんですけど、そもそも原画で読まれるっていう前提で書いてないでしょう。

東村アキコ 氏

そうなんですけど、私、つげ義春先生のマンガを、昔、宮崎の県立図書館で、ありますかって聞いたら、奥からさ、出してきたんだよ。それがさ、なんかこんなおつきかったの。

吉村和真 氏

あります、あります、つげさんの。

東村アキコ 氏

こんなやつだったの。それでね『やなぎや主人』とかあの辺を読んでみたんです。高校生のとき。

吉村和真 氏

それはいろんな問題がありますね。

東村アキコ 氏

いろいろ、そんで、そのときのね感動はね、すごい今も残ってるから。

話が入っていけるかって言われたら、あれなんだけど、まあ別の感覚としてあるんだなと思いますよね、なんか。私はちょっと雑やから、ちょっとおっきいの耐えられないけど、でも私のでよかったら、この蔵で原画読みたい。私のやつ、バチンバチンってホッチキスでバババって。

吉村和真 氏

それはだめだめ、だめです。だからだめなんだって、それは。

東村アキコ 氏

ホントに大丈夫ですよ。マジで、ホッチキス。人来るんじゃない？私のファンの人。アキコ先生の原画がホッチキスで留められて蔵の中にありますよって。

佐藤真一 氏

その辺はね、やり方はね、いろいろあると思うんですけど。

東村アキコ 氏

ラミネート類は、そしたら触れるやん、ラミネートやったら。

吉村和真 氏

そうです、そうです。だからそういう原画に触れますって、そのアキコ先生の蔵でのサイン会、皿サイン会やりますとかいったら、それはもう最強のコンテンツができるんじゃないですか。

佐藤真一 氏

そういうところを、例えばね所有者がそう言ってくれて、預けてる方の美術館が、じゃあやりましょう。蔵の持ち主も、いいですよって言ってくれたら、僕らイベントプロデューサーからしたら、いくらでもやれるんです。お金なんて、もうどうにもなるんで。で、なくなると、なんかこういうなんかね、コラボって言っちゃったらそれまでですけど、うまく使っていただくことによって何か変わってくる気がものすごくするんですよ。

吉村和真 氏

そうですね。あのね、さっき僕の学校のこと言ったでしょ。

小学校なので、机とか椅子とかもあつたりして、そこでマンガ読む人も多いんですが、実は1番多いのが、あのグラウンドの寝転がって読むんですよ。

ちょっと今、夏は暑くて無理なんだけど、季節のいいときは、みんな外で寝転がるんですよ。ある意味ね、それが正しい読み方なんです。マンガとの接し方としては。何が言いたいかって、この蔵の中だと、ゴロンゴロン寝転んで原画に触れるなんてことをしたら、もうこれえらいことですよ。もうホントに。

東村アキコ 氏

気持ちいいと思いますよ、あの床で、あの窓のない空間でさ。

吉村和真 氏

そのきれいなね椅子に座って、大きな美術館の中で原画集観るのは、さっきの艺术的な作法だとすれば、そうじゃない作法をこの蔵の中で原画との接し方をね発見していくみたいなのが、すごく楽しいと思いますよ。

東村アキコ 氏

究極の贅沢じゃん。普段、マンガってさ、バタバタ電車の中で読んだりさ、マンガ喫茶でさ、飲み放題のさなんか、飲みながらさ、狭いところで読んでても楽しいけど、私やっぱ旅行先に、旅館に持って行ってマンガを読む時間があつたら1番贅沢だなんて思うんですよ。それって東京じゃできないんですよ。

吉村和真 氏

わざわざ行って、その原画に触れる。

佐藤真一 氏

そうなんです。だから僕、それはなんかすごく感じてて、さっきね、できたら京都と秋田両方で何泊かみたいになってくると、来る価値がものすごく高まるじゃないですか。そこにね、またご本人が来ていただいてサイン会とかやってもらったらね、それちょっとたまらないですよ、ファンからしたら。

吉村和真 氏

だから先行例として、ちょっとね、あまりにもサービスが良すぎるので後が大丈夫かなって。

東村アキコ 氏

だってさ、私のマンガさ、なんか今だけっていうタイプのマンガだからさ、流行のやつだから、10年後になるとさ、ちょっとなんか使いづらくなるから、今ね流行ってるうちにやった方がいいと思う。

佐藤真一 氏

これでもなんかもうちょっとね、なんかこの話ししたかったんですけど、時間がだんだんなくなってきたんですよ。せっかく今日、会場に来ていただいているんで、さっきまだあれからいろいろ考えて、先生に何か聞きたいことある人、是非時間取りますので。

東村アキコ 氏

あとなんかさ、アイデアないですかね。原画使ってさ、うまいことさ盛り上がるさ何ていうの、マンガは文化だってさ、市役所で言えるようなことで、市長もいらっしゃってるから。

佐藤真一 氏

せっかくなんで、何か、あつ是非はい。お願いします。

質問者Dさん（女性）

こんにちは。今日は遠いところありがとうございます。

質問なんですけれども、東村先生の『タラレバ』とか『海月姫』とかたくさん原作として映画やドラマになっていますけれども、内容はやはりちょっと変わりますよね。それが先生によって違うと思うんですけども、東村先生的にはどういう形で脚本とかに関わってらっしゃるのかちょっと知りたくて。

東村アキコ 氏

私はもうホントに、割と好きにやってくださいって言っちゃうタイプなんですけども、ただ、最初に条件を幾つか結構きっちり出すタイプなんですけど、その後、途中途中で口出すと、ちょっとなかなか大変だし、お互い、あと何ていうんですかね、口出したからいいものができるっていうわけでもないんですよ、あの世界って。なんか別もんでも好きにそっちでやってもらった方が良くなったりとかして、私、結構宝塚歌劇が好きなんですけど、よくね原作があるものを舞台にするんだ

けど、噂で原作者がめっちゃ口出したらしいよっていうのってやっぱ面白くないんですよ。で、もうね、原作と別なんだけど、もう先生がね好きにやっていいって言ったんだってっていうやつは、やっぱりクオリティが高いんですよ。だからやっぱりプロデューサーとか監督を信じて、もうやっちゃって、そのかわり面白いものを作ってくださいっていうふうにしてますね。もちろん変わっちゃうじゃないですか、マンガと。でも私のファンの方は、マンガの方をやっぱり好きでいてくれるっていう自信があるし、あと、マンガの人とか街で会うでしょ。先生、タラレバ、まあまあみたいな感じで。うん、わかっている、もう大人の事情とかねみたいなのところも、変わった部分はね。でも、何だろうな、もしね『かくかくしかじか』が、今、何の映像化の話も来てないの。

吉村和真 氏

オファーもなかったですか。

東村アキコ 氏

オファーもあんまないですね。まだゼロなんですよ。『かくしか』は、私ちょっと本気で口出すと思います。『タラレバ』とかは、こう派手なトレンドードラマみたいな感じだけど、『かくしか』は、やっぱちょっと口出そうかなと思ってるので、『かくしか』だけは大丈夫だと思います。

質問者Dさん（女性）

『かくかくしかじか』は私も1位に書いたの。

東村アキコ 氏

ありがとうございます。

質問者Dさん（女性）

はい、ホントに楽しみにしています。ありがとうございます。

東村アキコ 氏

ありがとうございました。すいません、長

くなっちゃって。

佐藤真一 氏

ありがとうございます。

もうちょっと時間大丈夫ですかね。ほかの方、じゃあ、彼女。

質問者Eさん（女性）

今日は貴重なお話ありがとうございました。すごく面白かったです。

今日のテーマをチラシとかで拝見させていただいて、1番、ああ全然、内容は全然違ってたんですけど、東村先生の作品にすごい地元の宮崎の言葉もすごく出てくるじゃないですか。そういう意味でいうと、なんか地元の方とか、反応があったのかなというのは。

東村アキコ 氏

宮崎はですね、何の反応もないです。そういう県民性なんです、あそこは。こういうのもオファーも、1回だけね高校生相手に、高校生にマンガ家っていう職業はみたいな話してくださいみたいなのはねあるけど、基本、みんなこうのんびりしてるんで、これをねどうにか地域の活性化につなげようとかね、なんかこれでイベントやろうとかね、プロジェクトやろうって仕切る人がね、いないんです、宮崎は。恐ろしくいないです。県民性だと思います。行けばわかります、宮崎に。バスの運転手さんが、バスの運転手さんマイク付けてるじゃん。もうずっとしゃべってるの、運転しながら。だからさ、行き先も言わないし、どこに着いたも言わんで、ずっとしゃべりっぱなしで運転しているような地域なんで、そうなんですよね。

質問者Eさん（女性）

あともう1つ、ごっちゃんの今を。

東村アキコ 氏

ごっちゃん今6年生になって、夏休みなんです、今日はおじいちゃんとおばあちゃんに見てもらって、東京に。こっち連れてこなかつ

たんですけど、全然普通に、ユーチューバーになりたいって言ってますね。

吉村和真 氏

ものすごく普通の小学生。

東村アキコ 氏

普通の小学6年生になりました。特に変わったこともなく。でもね、元気です。

質問者Eさん（女性）

ありがとうございました。

佐藤真一 氏

宮崎すごいですね。

東村アキコ 氏

宮崎はもう、大分も似たようなもんじゃないですか。

佐藤真一 氏

似たようなもんなんですけど、改めてね地方って面白いなっていま思いました。

東村アキコ 氏

やっぱね、県民性、やっぱ東北と違ってね。

佐藤真一 氏

違いますよね。

質問者Fさん（女性）

こんにちは。今日はありがとうございます。

私、東村先生のマンガすごい好きで、全部持ってるんですけど、読むときに必ず発売日に買って、お酒用意して、部屋でこうやって読んでます。

東村アキコ 氏

ありがとう。綺麗だし、うん。

質問者Fさん（女性）

それで、読んでる途中でちょっと置いて、まじか？とかって言いながら読むんですけど、きっとみんなそうやってるのかなって思うんですよね。そのマンガ自体もちろん好きなんですけど、巻末が1番好きで。

東村アキコ 氏

あつ、おまけがね。

質問者Fさん（女性）

はい、1番好きで、いつか女子会やりたいっていうようなのあったんですけど、やっぱり地元でも結構人気なので、それ見ながら、ちょっとあそこの。

東村アキコ 氏

蔵で女子会やりましょう。

質問者Fさん（女性）

それやりたいですね。

吉村和真 氏

蔵でね。

東村アキコ 氏

女子だけでね。別にみんながお酒持ってくりゃいいんだから、すぐできる、そんなの。

吉村和真 氏

マンガは関係ないんじゃないですか。

東村アキコ 氏

マンガその辺に置いといて。

質問者Fさん（女性）

そのシーン見ながら、いや、ここどう思う？とか。

東村アキコ 氏

あっそうね、あっいいかもね、うん。女子会。

質問者Fさん（女性）

女子会やりたいです。

佐藤真一 氏

女子会だけじゃなくて野郎ばかりの。

吉村和真 氏

男子会やりましょうよ。

東村アキコ 氏

男子会は外でやってもらって。

佐藤真一 氏

蔵の中でやらせてくださいよ。

東村アキコ 氏

かまくら、かまくら。

佐藤真一 氏

かまくらね。

東村アキコ 氏

ありがとうございました。やりましょうね、是非、一緒に。

佐藤真一 氏

じゃあそれはイベントって形でプロデュースさせていただければと、はい。

もう一方いきますか。

質問者Gさん（女性）

今日はお三方にお会いできて、とても光栄です。ありがとうございます。

先程から「マンガは文化」というテーマでお話伺ってるんですが、どうやって活かしていくかという話で、大体がすべてがまずすごく傾きながら、そうだよなと思いながら聞いてたんですが、1つやっぱり子どもが、私も子どもがいる親の身として、興味のある子がマンガを学ぶ場があるといいなっていうのをちょっと思いました。子どもにマンガはいけないものだっていう風潮があるので、ちょっとやっぱり学ばせる場っていうのが、もうない状態で、やっぱり夢をもったとしてもどうしていいかわからないとか、あとやっぱり夢半ばで諦めてしまうっていうのが、うちからもそうですけど、ずっと継承されて残っているものってあるので、そうなっていったら素晴らしいと思っているので、子どもたちの未来に何かきっかけが生まれるものがあるといいなと思いました。

東村アキコ 氏

そうですね。だから、ここの京都精華大学のマンガ学部って、私できたときはね、そんなマンガなんて学校で習うもんじゃないでしょうって思ってた方の人間だったんだけど、今、どんどん作家が出てるんですよ、売れっ子が、もうホントに、嘘みたいいろいろなジャンルに。だからやっぱり教えるのって、やっぱり結局、手っ取り早く技術とね要領を身につけてね、描きたいものは本人からわき

上がってくるものしかないけど、やっぱマンガってテクニックの部分もすごく大きいんで、量を描かないといけないから、だからね何かしら、矢口先生ってそういうことも多分やりたかったと思うんですよね、あの美術館で。ちょっとこうワークショップみたいな教室的なものもおやりになりたいと思うので、なんかちょっとねゲストを呼んで、そういう一日だけワークショップとかあったらいいなと思いますけども、私は。

佐藤真一 氏

そういうのを是非なんか美術館リニューアルしてからね。

質問者Gさん（女性）

リニューアルをきっかけに。

佐藤真一 氏

是非参加してください。

質問者Gさん（女性）

はい。一步踏み込んだものも期待しております。ありがとうございます。

東村アキコ 氏

ありがとうございます。

佐藤真一 氏

じゃあ最後になると思います、もう1名、男性の方。

質問者Hさん（男性）

先生、こんにちは。

東村アキコ 氏

こんにちは。ありがとうございます。

質問者Hさん（男性）

初めまして。この日すごい楽しみにしてました。ポッドキャストも聴いてます。

東村アキコ 氏

あっありがとう。私、ポッドキャストでラジオやってるんで、是非お暇な方、聴いてみてください。

質問者Hさん（男性）

いろいろしゃべりたいことあるんですけど

も、とりあえず強いて挙げれば、今日の着物召されてまして、まさか生の着物姿見れると思ってなくて。

東村アキコ 氏

これ朝、旅館で慌てて20分で自分で。

寝坊しちゃって、もう大慌てで着てきたんですけど、うんうん。暑かったね、でもね、今日ね。

質問者Hさん（男性）

いつもジャージ姿とか、いろんな服着られてて、何着てもすごい似合うなと思うんですけど、いつもあれですかね、自分のチョイスで、直感で決められちゃう感じですかね。

東村アキコ 氏

そうですね、自分で直感で、その日の、大体でもやっぱり何ていうのかな、今日はさ、ちゃんとした場だから着物で行こうかな、ぐらいは考えるけど、あと基本、自分で好きなのをその日の気分で着てますね。

質問者Hさん（男性）

わかりました。ほかにもいろいろしゃべりたいんですけど、またファンミーティングとかで。

東村アキコ 氏

また、もう顔覚えてけん、大丈夫。

質問者Hさん（男性）

ありがとうございます。じゃあまた、いろいろな方たちと交流深めたいので、よろしくお願いします。

佐藤真一 氏

じゃあホントにいい時間になってきましたので、もっとお話したいことあると思うんですけど、最後にね、締めの方に少しいかせていただきたいんですけど、これちょっと僕が締めてもしょうがないんで、ディズニーがね、なんか「現状維持は後退するばかり」っていう言葉を残しているんですね。

東村アキコ 氏

私、この言葉知らなかったんですけど、すごい言葉ですね。

佐藤真一 氏

そうなんです。でね、これ実は今日みたいな場じゃなくても、いろんなところ行って話んですけど、ディズニーなんかは、考えたらネズミ1匹のキャラクターでね王国っていうか全部を創っちゃっているじゃないですか。これってやっぱりよくよく考えたらすごいことで、そこまで1つのものを使いこなすってなかなかできないですよ。そういう意味でいうと、アキコ先生ね、さっき原画がここにあるっていう、あるっていうのは、勇気を持って預けてもらったわけですけど、使わなかったらね、普通あのね押し入れに入ったものを預けてるだけであってってなっちゃうんですね。そういう意味で、今日いろんなことさんざん言われているんですけどね、ファンの方も含めて、是非ねさっき我々も使い方わかっているわけじゃないんで、どうしたらいい、意外とファンの方の方が知っていたりとかね、ほかの業者の方が、いろいろ言っていた中で、また何か変わってくるかなと思っているんで、この言葉を最後にしたいんですけど、吉村先生から、ちょっと一言ずつ会場にいただいて終わりたいと思います。

吉村和真 氏

結局、今日はですね、美術とマンガがどう違うかって話をしたと思うんですよ。でね、美術・芸術っていうのはですね、そのものが持っているオーラみたいなものに惹かれてみんなが集まってくるんですよ。でも実はマンガっていうのは、もう基本的には複製の大量の印刷物なので、それ自体がそういうやうやうなものじゃないんですよ。だけど、それも1つの原画から始まっているので、一体それが何なのかというのを実際に見に行けると

いう場ができることの意味は、絶対おっきいというのはわかっているんです。但し、これポイントなんですけど、ものに惹かれるんじゃないでね、マンガってやっぱりそれを支えてきていた人たち、ファン、みんなで作っている感じがあります。作家だけでなく。

東村アキコ 氏

簡単に言うと、アンケート処理で、こっちのキャラ殺したらみんなからクレーム来たから生き返らせたとか、もう書いていきますからね。

吉村和真 氏

だから、その原画、新しくリニューアルするねその施設を、誰かがやってくれるって期待するんじゃないで、自分も関わられるようなその美術館にして、何かしら原画のその収蔵とか活用に自分が関わっていく余地をたくさんあげたらいいなと思うんです。そしてみんな支えていく。その代表がこの美術館の学芸員であって、その人にきちんと信頼できる人がいれば原画も預かるし、その預かった活用の中でみんな支えていくみたいな、そういうね人がつながっていくその新しい美術館の形のまんが美術館はもてると思うので、もうそこはすごく期待したいです。そこが普通の美術館と違う可能性だと思います。

東村アキコ 氏

私やっぱりね今回「マンガは文化」だっていうテーマでこのトークセッションをやったわけですけど、マンガはやっぱり間違いなく文化であり、芸術なんだけど、マンガの原画が芸術品なのか、アートなのかっていう話しには、私はいつもノーって言ってたんですよ。アートのその美術、芸術品ではないというスタンスはずっと昔から言ってて、それは別に、あんなのゴミだよって言うわけじゃなくて、海外の美術館も行ってます。なんか最近縄が張られててさ、近寄れないじゃない

ですか。写真は最近オッケーになってきたけどさ、何か遠いのすごい、見に行ってもさ。でもね、それが嫌なの。マンガってもともと寝っ転がってお菓子こぼしながら、ジュースこぼしながら読んでたからみんなの心に沁めてきたわけで、それをね急に美術品にするっていう気はないの、私は。でも美術館に預けたのは、何かしらその間の活用ができるんじゃないかなっていうふうに思ってるんですよ。それは私の原稿をあそこに飾ってくださいとかね、あそこでみんなに見せてくださいっていうんじゃないで、私の原稿でそのシステムが作れたらいいなと思ってるの。私が呼び水になって、他の作家が、東村預けてるんだったら俺も預けようかなって行って、もっとすごいね、もっと売れっ子の人とかがどどんねこのなんかプロジェクトって言えば堅いけどさ、この何だろうな、わくわく感のあるさ、これにさ何となくみんなが参加してくれて、そこも拠点に、そのまんが美術館と、京都もそうですけど、拠点にまんが美術館があるっていう国にするのがいいなって思うんです。それってやっぱり難しい話ではあるんだけど、まあ何となくそれにみんなが、ここのねみんながね参加したくなるのは、やっぱりちょっとでもいいんで、リニューアルしたときに、何かしら運んでほしい、足を美術館にね。スタッフの人に気軽に声をかけてほしいです。あのときアキコ先生の講演会を見に行っ、行ってみようと思って来た者ですって言ったら、まんが美術館のスタッフの人って、すごいもうみんな気さくだしね、おしゃべりしてってなったときにね、例えばなんかイベントやるときにね、私暇なんでちょっとね、今日だけ一日だけちょっと手伝いますよとかね、そういうのも生まれてくるかもなと思ってるんです。だから、そういうそのね組織って変だけどさ、何となくサポ-

ター、まんが美術館のサポーターみたいな気持ちで今日来た方が思ってもらえるといいなと思っ、それが私のすごい望みです。今回の。

佐藤真一 氏

ありがとうございます。

吉村和真 氏

マンガは文化っていう議論、カルチャーだけどハイカルチャーじゃなくて、サブカルチャーですね。

東村アキコ 氏

ああ、いいですね。サブカルチャー。

吉村和真 氏

そういうもんだと思います。

佐藤真一 氏

もう最後にホントなっちゃうんですね。このプロジェクトって、もちろん横手市さんとか秋田県含めて一生懸命やっていて、現場の方たち頑張っているんですけど、ただ、今日来ていただいた方が、さっき先生言っていたようにね、何かの形で関わっていただいて、あの美術館、行っただけでもいいし、関わってくるが増えてくると、多分間違いなく他と変わってくると思うんですね。だから、そういった意味で、リニューアル前からいろいろもう地元が動いてるので、何かね、行っってみるなどしてね関わっていただいて、最終的には、さっき出ていた部分を払拭して、新しい目指す形がいけばいいなと思っ、そのきっかけのね一日に今日ね、短い間でしたけど。

東村アキコ 氏

とりあえずリニューアルオープンときは、みんな1回集まってくださいよ。

佐藤真一 氏

ああ、いいね。

東村アキコ 氏

なんかワームみたいな、風船ワームみたい

なね、ちょっとそれ全国ニュースにやるぐらいの目標でいきましょうよ。せっかくリニューアルするんだから。

佐藤真一 氏

約束ということで、是非。

吉村和真 氏

蔵でね。

東村アキコ 氏

蔵で、リニューアルのときは、もう蔵、さすがにいいでしょ、飲み会しても。やらしてもらいますよ、そのときは。

佐藤真一 氏

じゃあその辺はまたね、地元と調整しながら頑張っていきたいと思いますけど、ホント2時間、長い時間で、休憩も入れずにちょっとやっちゃいましたけども。

東村アキコ 氏

難しい話すいませんでした。

佐藤真一 氏

ありがとうございました。

司会

東村様、そして吉村様、佐藤様、熱いトークセッションでした。ありがとうございました。それではお三方が退場いたします。皆さま盛大な拍手をお願いいたします。

皆さま本日は長時間に渡ってご静聴いただきまして誠にありがとうございました。それでは以上をもちまして秋田県市町村文化講演会「マンガは文化」を閉会いたします。本日はありがとうございました。

平成29年度市町村文化講演会講演録

平成30年2月発行

編集・発行 (公助)秋田県市町村振興協会

〒010-0951秋田市山王四丁目2番3号

秋田県市町村会館内

TEL 018-883-0022 FAX 018-883-0024